

硯 滴 考

[16]

令和六年六月吉日

公益財団法人

大平正芳記念財団



硯
滴
考

[16]



目次

はしがき	4
最新刊書『大平正芳の中国・東アジア外交』の紹介	
・ 発刊に寄せて	6
・ 書評	10
拓殖大学前総長 渡辺利夫	
三中時代の思い出	12
高等試験断層	16
高松時代の思い出	22
転換期の自覚	27

杉村博士への追慕……………	31
一橋以来のわが道―大平正芳君よもやま話 対談者 作家・城山三郎……………	36
橋畔随想 保守の哲学……………	77
エール大学と私……………	82
故中山伊知郎氏の葬儀における弔辞……………	89
大平哲学のふるさと 宮澤健一……………	93
『職分社会と同業組合』……………	97

はしがき

この度、『硯滴考』16号ができあがりましてのご高覧・ご講評を賜れば幸甚に存じます。

今号は、大平の母校（中・高・大学）の同窓会誌への寄稿文集（対談、本人の大学卒業論文のうち「序文・本論の構成・参考文献」の抜粋、並びに「エール大学と私」の名譽学位についてのエッセイを含む）の特集号です。「大平哲学のふるさと」ともいうべき勉学のキャリアの諸相をたずねて見ました。あわせて、昨年末に出版予定でした『大平正芳の中国・東アジア外交―経済から環太平洋連帯構想まで』が3月始めに出版されました。その内容は5〜11ページに紹介されています。ぜひお読みいただきたく存じます。

令和六年六月吉日

公益財団法人 大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

経済から環太平洋連帯構想まで

大平正芳の 中国・東アジア外交

大平正芳は「歴史の転換点」に
どのような舵取りを行ったのか？



大平正芳の 中国・東アジア 外交

経済から環太平洋連帯構想まで

大平正芳は「歴史の転換点」に、
どのような舵取りを行ったのか？

川島 貞・井上正也 編著
©2009 財団法人 大平正芳記念財団

気鋭の研究者15名による「大平外交」論

目次

【本書の内容】

序論 井上正也・川島 真

第一章 宏池会首相たちの外交と系譜 宮城大蔵

第二章 大平正芳の経済外交 鈴木宏尚

第三章 環太平洋連帯構想の淵源 大庭三枝

第四章 大平外交の出発 金 恩貞

第五章 中華民国から見た大平正芳訪華 川島 真

(一九六四年七月)

第六章 中国から見た大平正芳 杉浦康之

第七章 大平正芳と日中国交正常化 鹿 雪瑩

第八章 日中航空協定と大平正芳 井上正也

第九章 一九七〇年代日ソ関係と田中・大平 横山雄大

第二〇章 福田外交と大平外交の変化と連続 若月秀和

第二十一章 大平政権の環太平洋連帯構想における中国・ソ連 神田豊隆

第二十二章 対中ODAの始動 徐 顕芬

第二十三章 国際秩序と日中関係の狭間 李 彦銘

あとがき 川島 真・井上正也

『大平正芳の中国・東アジア外交』

発刊に寄せて

公益財団法人 大平正芳記念財団

理事長 大平知範

理事 大平裕

当財団は、大平正芳の没後、「日本経済団体連合会」の協力で設立され、大平正芳の思想と政治家としての業績を顕彰・普及することを目的に活動を行っております。特に、大平正芳が提唱した「環太平洋連帯構想」を軸として、これに関する優れた書籍には「大平正芳記念賞」を、学術研究に対しては「環太平洋学術研究助成費」を授与いたしております。

一九七二（昭和四七）年九月、田中角栄かくえい総理・大平正芳外相、周恩来しゅうおんらい総理・姬鵬飛きほうび外交部長によって日中共同声明の調印が行われ、日中国交正常化が実現いたしました。二〇二二年はその五〇周年ともなることから、当財団として周年行事を計画いたしました。主には大平正芳の政治思想や政治活動について焦点をあてた書籍として、二〇二二年一〇月には

『大平正芳とその政治 再論』を上梓いたしました。

一方、「外交」に焦点をあてた活動では、当財団の「大平正芳記念賞」の運営・選定委員も務めていただいている東京大学・川島真教授にお声がけさせていただき、慶應義塾大学・井上正也教授を始めとする新進気鋭の学者二名を含む「一九七〇年代の日中関係の展開と大平外交」と銘打ったプロジェクトがスタートしました。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大に伴い、海外はもとより国内での調査活動そのものにも困難を極め、オンライン会議を駆使しての編集作業を通じて、今般の『大平正芳の中国・東アジア外交——経済から環太平洋連帯構想まで』を上梓いただけることとなりました。

大平正芳の総理としての在任期間は、一九七八年二月から急逝する一九八〇年六月までの五五四日と短いものでしたが、総理就任前の実績も含めると、日中国交正常化はもとより、日韓請求権協定、現在のA P E Cにも繋がる環太平洋連帯構想、ソ連のアフガン侵攻時のモスクワ・オリンピックのボイコットに象徴される対西側協調路線など、生前に残した業績は枚挙に遑いとまがありません。世界的な歴史の転換点にあって、大平は我が同の政治・外交を担ってきたと言つて過言ではないものと存じます。

一方で、国益をかけてお互いに主張することはあっても、最終的には相互信頼を重んじて

おり、大平の没後、米国・カーター元大統領、中国・華国鋒かこくほう元国家主席は個別に瀬田の自宅まで弔問のため足を運んでいただき、日韓請求権問題で侃々諤々かんかんがくかくの議論を交わした韓国・金鍾泌ジョンシム元國務總理には、私的に多磨霊園を墓参いただいたことなどは、このことを象徴しているものと考えております。

本書では、このような時代の「中国・東アジア外交」を振り返って一三本の論文を掲載し、大平正芳の思想をもとにした、「経済から環太平洋連帯構想まで」の実証研究を詳述いただいております。川島真教授ならびに井上正也教授の采配によって、多角的・複眼的にこの時期を見据える内容となっており、戦後外交史の新天地を開くものと確信いたしております。

ロシアによるウクライナ侵略、イスラエル・ガザ戦争、緊迫する東アジア情勢など、現在、日本を取り巻く環境は、これまでにないよう緊張した事態となっております。かつて、大平正芳が在職していた当時と同様に、歴史の転換点と次世代に語り継がれるような時代に生きている我々に、本書を通じて、過去から学ぶことで新しい時代を考える一助となれば幸いです。

最後に、編纂に多大なるご尽力をいただきました川島真教授・井上正也教授をはじめ、論

考をお寄せいただいた先生方、また出版にあたってのご協力をいただいたPHP研究所の大久保龍也様・PHPエディターズ・グループの岡修平様に御礼を述べさせていただきます。

以上

【書評】（産経新聞3月31日）
『大平正芳の中国・東アジア外交』（川島真・井上正也編著）

評・渡辺 利夫（拓殖大学前総長）

国交回復を巡る秘話

日本の「戦後処理」のうち最後まで残された課題が、日韓、日中の国交回復である。

いずれも難渋をきわめる外交課題であった。本書は、この課題に立ち向かった往時の外相・大平正芳（1910～80年）の決断の物語である。

日韓交渉は51年に開始され、その間に深刻な中断時期をはさみながら65年の決着までに実に14年を要した。最大の原因は「過去の清算」の性格をもつ韓国の対日請求権の問題であった。これはほとんど日韓のイデオロギー論争の様相を呈して、容易に決着とはならない。両国の有徳の士が知恵を絞りに絞り「経済協力方式」による解決という提案が編み出されて、どうにか合意となり日韓基本条約、日韓請求権協定にたどり着いた。

この合意形成において主役を演じたのが、池田勇人政権下の外相・大平であった。日本が韓国に無償供与3億ドル、有償借款2億ドル、民間借款1億ドル以上を供与することにより、過去清算問題を「棚上げ」にして合意にいたった。池田首相の欧州歴訪中の、しかも合意を渋る池田との事前協議のない大平の独断であった。池田の帰国後、大平は池田に向かって「こんなもの安いもんです。もっと先に行けばもっと余計になりますよ」と語ったと本書に記される。

72年の日中共同声明の発出にいたる過程で最大の障害となつたのは、日本が台湾との間に結んだ日華平和条約であった。もし中国側がこの条約を「不法にして無効」だといふのであれば、主権国家としての日本の面子が立たない。共同声明に「日本国政府はかつて日本が戦争を通じて中国人民にもたらした大きな災いに対して、責任を痛感し深く反省する」という趣旨のことを書き入れるので、これで決着したいというのが大平の提案であったという。万里の長城に向かう車中での大平と中国外相・姬鵬飛との合意である。かくして日中共同声明への道が開かれた。

日中韓13人による意欲あふれる共同研究の成果である。

三中時代の思い出

三中（三豊中学）は、現在の香川県立観音寺第一高等学校。このエッセイは、昭和42年、同校の創立七〇周年記念誌に執筆を求められたもの（昭和45年11月1日執筆）。当時の旧制中学校生活の雰囲気がまざまざと伝わってくる。後に『在素知贅』、『大平正芳全著作集』3巻（講談社）に収録。

昭和三年四月、私は三豊中学に入學した。新入生にとっては、まず服装が第一の関心事であつた。新しい洋服は霜降りの夏服まで待つことになっておるので、当分は和服に靴をはいて通つたものである。夏服ができ、秋には冬服の用意も整つた。冬の外套は新しいのが欲しかったが、本家の従兄のお古で間に合せることにした。洋服は何れも五、六円で、たしか丸亀の秋田という店で調達したように覚えておる。

毎日、豊浜駅から汽車で通學した。最初は旧式の客車で、ボギー車が通るようになったのは高学年に進級してからであつた。いつであつたか、東京の大相撲が巡業に来て、汽車に乗る時、各座席の横についておるドアの入口が狭いので、体を横にして乗車している姿を見た

こともあった。男子の学生は列車の前半、女子の学生はその後半に乗るのが不文の慣例であった。

観音寺駅前の一貫堂は、当時からパン屋としてその盛況を誇っておったが、われわれは買ひ食い禁止の校規を破って、しょっちゅう裏の台所でふかし立ての甘いにおいのするパンを食べさせてもらったものだ。やさしかった奥さんの温容が、今でもありありと思い出される。

当時は三島中学ができたばかりであったので（三島中学の開校は大正一二年の春であった）、東予地方から多くの学生が三豊中学に汽車で通っておった。私の一年生のとき五年の橋本克彦さんは、寡黙で礼儀正しく、しかも眉目も学業も秀れておった。いつも駅や車中で静かに勉強しておったが、そのノートは鉛筆でとても綺麗に書かれておった。この人は、六高から東大に進まれて国文学者になられた。

私より二年上の三宅秀郎さんは、四年から一高に入った秀才で、東大の医学部を出て、現在東京のある病院の部長をしておられる。彼は当時から強い近視眼であった。三宅さんと同期には、私と同じ村で田中隆造さんという当時からよく鍊れた思いやりの深い先輩がおられた。村一番の素封家の次男であったが、洋服や靴も質素で、ノートや鉛筆の一片さえ、心に

くいまでに大切にされていた。野球部のマネージャーとしてすぐれた統御力を發揮され、それも手伝つてか今は故人となった木村名投手を擁した三中野球部は、高松や松山の名門チームと立派に接戦を演じていた。田中さんは六高から京大法学部に進まれ、現在では阪神電鉄の専務の要職にある。

私のクラス（二四回）は、三中にとつては、一〇〇名定員の最後であつたが、いわば、豊作ともいふべき出来で、秀才が雲のように輩出した。トップクラスには共同石油社長の森誓夫君、観音寺一高校長の本田益夫君、京大教授の佐伯富君をはじめ、観音寺市で開業されておる大西逸平君、高瀬の松岡健雄君、財田の川原恒雄君、鹿島建設の田中淑造君、その他がいた。私などは、はるかその人達の後塵を拝する凡才であつた。七〇数人の卒業生の中、官立の高校と高専に進学できた者が、たしか三〇〇人位はいたように思う。

当時の三中学校長には、増田、生井、梅津の三先生が相次いで就任された。中井虎男先生は別格で、全く栄達を他処に、子弟の教育に没頭され、校外外の高い尊敬をあつめておられた。片山伝蔵先生、細川敏太郎先生、高井佐武郎先生等には、母校の先輩のせいとか、特別のきびしさと親しみを感じたものである。細川先生の漢文の講義は、私にとつては、楽しみの一つであり、田舎の中学生にとつては勿体ないような魅力ある名講義であつた。

春まだ浅い卒業や入学の時の人々のせわしい気配、新しく手に入れた教科書のもつ新鮮な感触、有明の浜の水泳や野外演習を彩った友の姿や顔また顔、くずし^{*}や、ちくわに濃いぬかの香をもつ新香を添えた弁当の魅力、校庭の隅で時折展開された上級生のリンチをめぐる緊張、丸亀中学や西条中学との対校試合にかける興奮等々、母校を舞台とする思い出はつきない。その母校も今年はいよいよ七〇周年を迎えようとしておるし、私も到々還暦を迎えるに至ったのである。

※くずし

蒲鉾（かまぼこ）のこと。魚肉をすりつぶして（くずして）作られることから「くずし」と呼ばれるようになった。

高等試験断想

昭和11年4月10日に大蔵省入省。執筆日はその翌日になっている。母校・旧制高松高商の同窓会誌『又信』（又しん）八号（同年八月）に掲載。同校の後輩に向けて、先輩として、高等文官試験受験の心構えを説いて、後輩を鼓舞して已まぬエールを送っている。後に『在素知贅』、『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。

丸重先生より近頃同窓の方々で高文をねらつてゐる人が相當多いやうだから参考のために君の経験を綴つてくれとの御依頼をうけましたが、各人夫々性格や環境の相違があるので私の採つた具體的な或は技術的なやり方を紹介したところで果して効果的かどうか疑はれますから、ここでは高文受験に對するもつと普遍的な心構へ^{こころかまへ}でも申すべきものを書いてみたいと思ひます。

（一）先づ第一受験を志す以上は職業として官吏を選ぶ考へだらうと思ひますが、自分は官吏になるんだと言ふ意識^{いしき}を何時も持つて勉強することが大切であると考へます。元來職業

の如何は私共にとつては第二義的な問題で一概にこれがいいとかあれでなければならぬと言ふわけでもありませんが、今日の如く一旦職についた以上その後の転職がおそろしくむづかしい時代には、職業の選択は自己の性向其他の事情を慎重に考慮して相當の熱意と準備を以て當らなければならぬものと思はれます。かふ云ふつきつめた熱意と欲求がなければ、實のある勉強や準備は出来ないと思ひます。

(一) 次に私はどちらかと言へば商業經濟の専攻者でありますからかう言ふ特殊の立場を吟味してそれを生かすやうに心掛ける必要があると思ひます。今日のように知識の普及した時代に於ては、(殊に社會科學の領域に於ては) 専攻科目の如何によつてどの程度まで技術的な特長を主張し得るかは尚疑問の餘地はありますが、私共の思惟は少くとも多年商業學或は經濟學と言ふやうな實證科學の分野に於て訓練されてゐるので、法學士のそれとの間にはもの考へ方に相當の懸隔があることは否めませぬ。だから選択科目の範圍に於ては特に法律に自信のある人は別として、經濟科目を選び自分の特長をのばすのが得策であると思へます。

又かかる心構へは官界に就職するに際しても、更に進んでは愈々官吏となつてからも必要であると思ひます。今迄の官濟吏は行政官にしても司法官にしても殆んど全部が法學士であ

つたことは事實でありますが、最近のやうに經濟行政、經濟外交或は經濟問題の訴訟と言ふものの重要性が認識されて來て、官吏の經濟學的素養の必要が叫ばれて來、行政機構の改正を促す根因もかかる政治對象の變革に由來せることも今では一片の常識となつてゐます。かやうな情勢の下に於て私共經濟專攻者が官界に入ると云ふことは決して不自然なコースではないのみならず、むしろ極めて當然のこととさへ考へられます。最近の官吏採用狀況から推しても、かふ云ふ思潮の動いてゐることがよみとれるわけで、高文に合格した經濟學士、商學士は或意味に於て有利な立場にあると言つても差支へないと考へます。私共の一ツ橋からも永い傳統をもつ外務省は別としても、鐵道、商工の兩省をはじめとして内務、大藏、司法、農林、拓務等にもどんどん進出してその持つ特殊技能の故に特異な職分を果してゐます。行政事務の能率化、換言すれば行政の商化或は經營經濟化の必要が常に民間側から叫ばれてゐるがこの方面の開拓によつて時代の要求に順應した施政樹立の踏台となる役目は、大問題だけに事の成否も暫くおくも、先づ第一に私共經濟專攻者の担はねばならないところであるかと考へられます。

かかる必要は進歩的な法律學者をして民法の商化より進んで行政法の商化にまで行かなければならないと云ふ主張を抱かしめその法律的構成に努力せしめつつある状態にまで立至つ

てゐます。經濟專攻の高等教育をうけたものの實業界に於ける先驅者的使命が半ば終了したかの感がある現在、官界に於て彼等の開拓を待つ処女地が尚残されてゐると云ふことは面白い事實であります。歴史は徐々にではあるがこの方面に於ても大きい旋回を開始してゐます。

(三) 少々問題の本筋から離れましたが次に勉強の方針について一言します。私は一科目について一つの基本参考書を中心にその内容の消化と諸原則、諸現象の有機的聯關的理解に心掛けました。他の二、三の参考書も讀みましたが、基本参考書の理解に必要な限度に止め自分の體系は基本参考書に基いて築き上げました。又散歩をしたり電車に揺られてゐる間にも大抵一つの問題を頭に描いてゐてその内容を吟味したり或はそれに聯關した法律關係なり經濟原則なりを考へる習慣をつけました。例へば道路を歩く時は道路の主體、民有地との境界査定權、公用の設定及び廢止、その所有權の性質及び制限、その使用に關する法律關係等を頭にうかべつつ眼前を右往左往する圓タクやバス或は電柱、その他のもの使用權の根據などを考へ併せ、學校や公園に行つても同様にそれを廻る法律關係を手繰つて行きます。すると面白いもので森羅萬象と言へば大げさですが、日常經驗する事件や目撃する現象が曲りなりにも法律的に解釋出来るやうになつて來ます。すると段々興味も湧いて來ます。經濟問

題にしても新聞や雑誌に表はれる記事を、經濟學の原則と關聯して得心がゆくまで考へるやうにして、不充分ではあるが言はば生きた學問をやるやうに心懸けました。

志を同じうする友人と議論することも効果的で、自分の考へを表現する訓練ともなり、自分が気がつかないで看過する側面を捉へ得ると云ふことにもなります。つまり根のある幅のある内容的な理解が必要だと考へます。殊にその有難味は口述試験の場合に痛感します。口述試験の目的はさう云ふ體系上連關があり、しかも内容的な理解があるかどうかを試すものであると言つても過言でないと思ひます。かやうな理解に裏付けられた自然な無理のない論理の運びがありさへすれば答案乃至は答辯の内容が試験委員の學說と符合しなくても差支へないと思ひます。勿論試験委員の著書を中心に勉強するのが普通のやり方ですがその人の結論へ所論を導かうとして先づレディ・メイドの目標を設定してかかると往々無理が出来たり論理の飛躍を取てしたりすることになつて却つて委員の心證を傷ふことになるのではないかと考へます。試験委員の如何やその學說の傾向等はそれほど問題とは思はれませぬ。要するにうすつぺらなバラツクの速成に焦心することなく、おちついてジツクリと鉄筋の土臺を築いて行けば建造半ばであつても立派に合格することが出来ると思ひます。

(四) 尚本會員の中では既に優秀な成績で關門を突破された玉置實(三回)、長尾頼隆

(六回) 両學兄の如き方々もありますし、現在孜孜として準備に精進されてゐる方もありません。歴史の新しい舞臺は展開されました。私は本會員諸兄が私共の周圍に巢喰ふ無理解にこだはることなく、或は無智に根ざし卑屈に養はれたコンヴェンショナルな考へに捉はれずにハッキリした歴史觀と職分觀に立脚してどしどし官界に進出されんことを切望して止みませぬ。

高松時代の思い出

自民党筆頭副幹事長時代に執筆された母校愛あふれるエッセイであり、旧制・高松高商の学園生活と教授陣の思い出を楽しく回想している。旧制・高商から新制・香川大学経済学部にそのまま引き継がれた同窓会誌『又信』（昭和42年4月）に所載。『硯滴Ⅱ』（昭和42年下期）にも掲載された。後に『在素知贅』、『大平正芳全著作集』2巻（講談社）に収録。

これでも私は高商在学時代、胸を病んだことがあります。高商二年の夏休みに私は軽い湿性肋膜炎というものに冒され、そのまま通学ができないこともなかったが、医者のお勧めもあり、思い切って休学することにいたしました。そのため五回の卒業生と同時に入学して、六回卒業ということになったのです。だから他の同窓諸君より一年余計に母校に厄介になっておるので、いわば多額納税者の資格をもっておるし、そのお陰で二倍の友人に恵まれておるわけです。今になって考えてみるとむしろ有難いことであつたと思います。

私が入学した昭和三年といえば、ちょうどはなやかであつた大正デモクラシーの風潮が漸

く色褪せてきたし、昭和二年の金融恐慌の余波も手伝って、明るい展望が見えない何かしら重ったるい感じのする時代であったように思われます。それでも校内にはまだロマンチックな雰囲気が残っていたわけではなく、南国の明るい甘美な自然と相俟って、自由で潤達な学園生活を楽しむことができました。

大泉行雄教授が、新進の商業学者として人気を蒐め、先生の恩師である奇才故大西猪之教授の衣鉢を汲んで、終始和服で出講され、黒板には右肩のあがった字を横に書かれておりました。それがたまらない魅力でありました。根岸、鎌田両教授の簿記は、私にとってまことに砂をかむようなさく莫たるもので、到々簿記は入口で遠慮してしまう結果になりました。堀江邑一教授の経済原論は、ナロードニキの翻訳のようなもので、先生はその当時から既にはつきりマルキシズムをみずからの学問と行動の指針とされておったようです。老来、先生は大変やさしくなられたようですが、今なお日ソ友好協会の片隅で、協会の仕事に精進されておるようです。いずれにしても一筋の真実を以て終始一貫その道を歩まれておる姿は立派だと思います。昭和六年満州事変に出張した軍人に慰問袋を贈るべく奔走していた私が、或日、こつぴどく先生に叱られたことを思い出します。上阪教授の英文学、矢田教授の独文学は、夫々に味のある待たれる講義でした。椎名教授の商品学、寺田老教授の地理学は、何れ

も地味ではあったが、その人格からにじみ出る真実さと犯し難い気品にうたれたものです。

中村賢二郎教授の商業英語ですが、イントロの名に恥じず、先生は講義を他処にその時折の人生の哀歓を醇々と説かれるのが常でした。だから、英語そのものよりは、その余技の方がむしろ人気を呼んでおりました。英語といえば当時外人教師として英人ハワード、米人ミニスの二講師がおられ、われわれ学生との間に日常の接触が随分ありました。お蔭で私はハワード先生に函館の高利貸から受けておる借金の支払遅延の弁解状を何度か書かされる始末でした。外人講師といえば独乙語にベルさんという六尺豊かな長身の先生がおられました。

この人は何でもロシア人で、気の小さい寡黙な方でした。ある時、何かのはずみで先生の講義をみんなでポイコットしたのですが、その時の悲しそうな顔が今に忘れられません。

法律は清水谷、藤本両教授に教わりましたが、法律のように歴史のある広汎な学問の領域は、ちよつとのぞいた程度で判る筈はなく、われわれにとって法律は終始重い荷物になつておつたことは争えませぬ。

体操ではオンビキのあだ名で有名な三木先生がおられたが、この人は、随分と世話ずきの人で、今日でいえば学生課長というような役割を併せもたれておつて、何くれとなく学生の身上相談にのつていただきました。軍事教練の配属将校は西村中佐でしたが、私の友人河野

吉兵衛君が、あとで西村先生の御令嬢と結婚されたところをみると、河野君は当時すでに西村中佐に相当気に入られておったのではないかと思われます。

沢田校長は、文部省の秘書課長から赴任された文字通り優れた学校行政官で、その端正な風貌、その几帳面な行蔵の故を以て、学園の内外に揺るぎないプレスチージを打ち建てられておりました。

当時の校友会雑誌に学生の論文がよく掲載されましたが、現在東京銀行の常務をしておる橋本清君が、一年の時に既に古典学派の学説史めいた長文の論文を投稿していたのには全く驚きました。尤も橋本君は稀にみる秀才で、私は今でも彼は日本における屈指の国際経済学者であると思っております。今は亡き植村福七君も、よく出来た秀才であったが、どちらかといえば彼は橋本君のようにアカデミックではなかったと思います。ところがその植村君が学校に残り、橋本君が銀行で銭勘定をするという廻り合せになったのは、何としても運命の皮肉であるように思われます。今春、不幸にして急逝した神原亀太郎君も同期でありました。彼は陸上競技部で一生懸命走ったり跳んだりしていたが、どこからみても秀才のようには見えませんでした。ところが生前彼は、われわれのクラスで自分が二番の成績であったと言ひ張るのを常としておりました。その根拠を聞いてみると、植村君が卒業式で総代として

答辞を読んだのだから首席であることはハッキリしておる。その次は俺だということです。尤も昭和二十年七月の空襲で母校が焼けてしまったので、その当時の記録が烏有に帰したため神原君の主張の正否をたしかめる道が永久に閉ざされてしまったわけです。神原君は泉下にあつても依然自分は二番で出た秀才としての誇りを今尚もち続けておるのではないかと思ひます。成績などというものは、なるべく公表しない方がよいように思われますし、できたら、いち早く焼き捨てておくに限ると大学当局に勧告したいと思ひます。

高松高商、そしてその後身香川大学経済学部は、決して天下の名門ではありません。名門必ずしもよき師とよき友に回り合うものではありません。私は高商でよき師とよき友に恵まれたことを感謝しております。それは私にとってはかけがえのない珠玉のように貴いものがあります。「人生は友情を求めて辿る旅である」と誰かが申しましたが、正に友情こそが、われわれにとつての唯一無二の財産であると思ひます。水にも溶けず、火にも焼けず、革命によつても奪われることのない大切な宝であります。得意の朝にも、失意の夕べにもわれわれの伴侶となつてくれる貴いものであります。校庭のアカシヤの並樹の緑が、いよいよ濃くなるように、高商を媒体として恵まれた師の恩と友の情が、年輪を経るに従つて益々濃くなることを希求して己みません。

転換期の自覚

田中内閣の大蔵大臣時代、昭和49年8月15日、終戦記念日にあたっての所感の一端を述べたもの。現在を戦後最大の大転換期として捉え、国民的な自覚を説く。『又信』（第54号・昭和49年11月）所載。後に『在素知贅』、

『大平正芳全著作集』4巻（講談社）に収録。

二千五百年前のヘラクレイトスに万物流転説というのがある。一般には明日の世界は今日の世界とは全く異なるという意味に理解されている。ところが戦後の世界の動向は、流転説の主命題にあるように戦いは万物の父、万物の王、全く流転説にいうところと似通ったような筋道を辿ってきているように見える。しかし、対立相克による発展が、このイオニストのいうようにロゴスによって全体的に調和のある姿に纏めあげられてきたとは到底いえない。少なくとも極めて最近に到るまでは、世界は戦後多くの矛盾を含み、残滓を吐き捨てながらも急速な物質面での拡大を実現してきた。この速度と規模は、驚嘆に値する。

私が高松高商に在学していた頃は、既に昭和のどす黒い思想破綻の波頭が次第に高まりつ

つあつた時代ではあつたが、実社会の変革は未だして、自然もまたふるさとのノスタルジアをはぐくむに足る麗しいものであつた。幾星霜は、矢のように流れ去つた。爛漫の春には桜が薄くれないの花吹雪を散らし、肅々の秋には銀杏が黄熟の厚化粧をしていた。小川は常に清らかで、町並みは年輪の堆積の下に静かに踞まつていた。

しかし今は違つている。世界が歴史的に断層的な大変化を遂げた。最近の百年間で物質社会の飛躍は月世界にまで伸びた。同じ速度で縮減化をたどると、次の一年間の変化は過去百年間の変化にも等しくなるかも知れない。これは恐ろしいことである。このように時間が極度に縮減しつつかある社会では、異つた思考や行動の軌範と形式が数多く氾濫し、大きなひずみや不均衡がもつれあうことになつた。進めば進むほどロゴスの調整はますますむつかしくなつてくるであらう。

戦後のまっしぐらの拡大と前進は、人間の生活を大きく変えてきた。これは同時に堪えがたい矛盾としこりと偏差を生んだ。これからの社会は戦後の目覚ましい前進と拡大に対して、安定と調整を練り直す社会でなければならないであらう。

ベーコンは『新オルガノン』で真理の見極めの前提として、先入観と経験の束縛に基づく四つのイドラ（幻影）を排除することを主張した。戦後、特に最近の社会で最も重要な課題

は、この実験哲学接近への前提的示唆である経験的イデオラを排除する価値革命又は意識革命であった。しかし、現在では却つてこのイデオラに郷愁を抱く人間生活への反省が取り上げられねばならぬ時代になりつつある。

拡大と前進は必ずしも発展と向上を意味しない。社会的矛盾が増幅し、人間の自由が押しつぶされ、生活環境が汚される惧れが多くなってきた。ここで前進や拡大の方向、その内容や速度等を反省して見るのが何よりも大切な問題になってきた。しかもこれは我々全部に対する課題である。

民衆の声は神の声、という有名な言葉がある。本当は民衆の声はそのままでは神の声ではない。同時に、その声は神の声だけで止まるべきでもない。国民の声を完全な神の声にし、その声を実現するための政治がなされなければならぬ。政治を担当するものは固より主体的な脊椎を持っていなければならない。しかし、個々の見解を押しつけることは政治本来の姿にもとる結果を生み出すことになる。国民の声を、良識と英知と情感に満ちた声に纏めあげ、その希求を実践に移すことが政治本来のあり方であろう。

現在は戦後のいちづの早駆けを振り返つて、人間自然の幸福を再発見しようと考えてる時代に入っている。これは僅か数年前に強い要請として世界的に現われてきた現実であつて、大

戦後の最初の大転換期といえよう。

人間は時の流れに棹さすものであるが、その流れを造り出すものもまた人間であつて神ではない。新しい社会変革を前段階との節目でどう立派に纏めあげてゆくかは、その時代に生きたる総ての者の肩にかかる仕事である。

日本は世界の潮流の中で、何時でも洪水の飛沫を多く浴びる国柄である。しかし戦後の大きな拡大の地馴らしを行ない、これを高い発展の結末にもち来る者は現在に生きている我々である。安定した均衡と秩序のある自由を実現するためには、この転換期における国民的又は人間的な自覚が何よりも必要であらう。

杉村博士への追慕

本稿は、『大平正芳全著作集』全7巻（講談社）の監修者・福永文夫獨協
大学教授が旧大平正芳記念館（観音寺市）所蔵の手書き原稿を起こしたも
の（欄外に「YMCA」と付されている）。ということと、『大平正芳全著作集』
2巻に収録された。大平が最も尊敬する人の一人として挙げた東京商大
（現・一橋大学）時代の杉村広蔵助教授から学んだことの大切さを語って
いる。ちなみに、杉村の著書『経済倫理の構造』（昭和13年9月初版）は、
大平が死の直前まで傍らに置き愛読した書であった。

私の一橋における学生生活も最早二十数年の過去に追いやられ、その間、日本は激動する
歴史の中をさおさしてきたのであるが、私にとっては生々とした昨日の出来事のように回想
されます。

当時所謂「白票事件」という学内騒動が起つて学内は二つの派閥に分れ、沈鬱な空気が、
学園を蔽つて居りました。鬼才杉村広蔵助教授の学位論文が、その分量において極めて小ざ

い論文（たしか経済哲学の基本問題に蒐録された一節）であつて、これで学位を請求するといふのは、審査員惹いては学界を小馬鹿にするものであるといふのが、白票にこめられたプロテストであつたようです。

ところが当の杉村先生は、抑々学位を学界に求めると言う以上は、学界に新たに一つのユニークな方法論をもたらすものでない以上、それが如何に部厚な力作であつても、僭上の沙汰である。学位論文が如何に分量が少くとも、一つの新たな、そしてユニークな方法論をもっている以上は、素直にその学問的価値を評価すべきであるといふのです。

問題は、量の問題ではなく質の問題だといふのです。私は学生として、このような対立の背景において、教授間にどんな感情的対立があつたかを詳らかにいたしていませんでした。そこで私は、私なりに、この問題を、素直に判断して、少くとも学問的には杉村先生の御説が正しいのではないかと思ひました。

私ができるように判断するについては、私の杉村先生に対する傾倒の念も手伝つていたと思ひます。私は杉村先生の「経済哲学」の講筵こうえんに侍つていたのですが、実のところ、当時の私の能力を以てしては、その講義を十分理解することができなかつたわけです。しかし私はその判らない難渋な講義の中に、不思議にも私を魅了するに足るあるものを感得したのでし

た。そのあるものの本体は、その当時、どうもハッキリしなかったのです。私は、卒業後も、そして先生の歿後においても、終始、杉村先生の著述を、繰返し繰返し読んでまいりました。そのうちに逐次先生の思想に親しむ傍ら、経済はもとより、人間に対し、社会に対し、私の眼識が拓かれて来たように思われます。私は講筵で先生のけいがいに接する以上に、先生との間にパーソナルな接触に恵まれましたが、先生は私にとっては大切な恩師にられました。

資本主義と社会主義に対する見方、貨幣に対する考え方、生産と貯蓄と投資の機能とその限界、経済性の理念の指向するもの惹いてはその前程にうかぶ文化価値というもの等々の精神と構造への理解に接近することができたことは大きい開眼であったと思いますが、更には歴史に対する考え方、人生のモチーフに対する反省というようなものが恵まれたことも、大きい悦びでありました。尚先生は大学は方法論を生命とし、従つて大学生はその方法論を体得しなければ大学に学んだね、うちがないのだという意味のことをよく云われました。このことは私の大学におけるデンケン「ドイツ語のdenken 〓思案」の修業に、大きい刺戟となり又導きの星となりました。

今日本では毎日百冊以上の新刊書が陸續と出版されているとのことです。この分量は、ア

メリカを凌ぐ勢いだそうです。しかし読み応えのある本、内容的にヴォリュームのある本、歴史の中でユニークなあるものを齎らすものは果してどれだけあるのでしょうか。最近古本市場では、明治物が高値を呼んでいると伝えられます。更には明治以前のものがこれまた、案外に高くなったと言われています。知識を求めるのに、毎日百冊以上の新刊は、十分に十分と思われますのに、一体これはどうしたことでしょうか。それは、今日の新刊では、われわれの希求するものが満されない証左であろうと思います。

自分の血となり肉となるような本は、そんなにあるものではないと思います。独り独創的な思想家に捉えられ、その理解に精進することだけで、与えられた自分の時間にそう大きい余裕が残るものではないと思います。神様が自分に生を与えられたのは、自分は自分としていかに乏しくとも、誰にも出来ない自分独自のユニークな思想と実践とを期待されているのではなからうか。神が「永遠の今」という時間を各人に恵み給うたことは、自分は自分としての永遠に連る寄与をしよう期待されていることではないでしょうか。先ず自分の自分なりの確立が大切です。それにはその根幹を貫ぬくバック・ボーンがなければならぬ。それは自分の勉強と施策と反省から生れて、不断に成長するであろう自分自体の方法論であろうと思います。これなくしては、私共は歴史から疎外されてしまい、その形成に参加する資格が

なくなるわけです。

限られた紙面で、多くを語る余裕がありませんが、このような考え方は、杉村先生の嚮導と、クリスチャニティの啓発が、私にもたらした賜物です。私は私に恵まれた学縁というものを心から感謝しています。

一橋以来のわが道——大平正芳君よもやま話

対談者 作家・城山 三郎

昭和49年10月28日、田中内閣の大蔵大臣時代に一橋大学の同窓である城山氏と行った対談。余暇、高齢化社会への取り組み、大学時代の師やゼミの思い出から一橋大学論まで、副題どおり「よもやま話」が披歴されている。『如水会々報』（昭和49年12月号）所載。その後『在素知贅』、『大平正芳全著作集』6巻（講談社）に収録。

これからの日本経済

城山 まず、会員すべてが関心を持っている経済問題についてお伺いしたいのですが、経済の安定した姿といたのはだいたいどんなものか。そして、その時期には、いつごろ入ってくるかどうかということをおっしゃっていただきたいと思います。

大平 安定した姿というのがわかれば、ぼくもたいへん楽なんだけど、それはわからないん

ですよ。なぜわからんかという点、日本の経済の規模というのは、いったい、いまの各種内外の制約の中で、どのくらいであつていいかということが、いまよくわからないんです。しかし、いまより非常に大きいものだという想定はなかなかできない。といって、いまより非常に小さいものにするといつても、これは不可能だし、わたくしは、いまあるがままの状態とあまり大きく変わらない状態というのが、いま一応われわれが想定しておかなきゃいかんのではないかと思ひます。そうすると、いま総需要抑制策という重しをはずしまして、皆さんどうぞ活発にやつていただきます、といきれるかどうかというと、またそれは非常に危いんです。むしろ、いまの状態というのが、いまのいろいろな内外の条件からいつてサイザブルなものだとすると、この状態は相当長く続かなきゃいかん。続けてしかるべきものだという理屈になつてくるわけですね。

そこで、その見極めが少しくまで、ほうほう繕いをしていこう——起きてくる事態に対してはいちいち放つておくわけにはいかんから、機動的対処をしながら、大きな規模としてはこのようなどをそんなに大きく崩さんようにやつていかなきゃいかんのではないかという感じがする。だから、そういう意味では、薄氷を踏む思ひですね。大股に歩けないという、用心深く歩いていかなきゃいかんのではないか、という感じですね。

城山 この前、原安三郎さんという、日本化薬の会長さんですね、九十歳ぐらいですけれども、あの人は現役の経営者としては最年長だし、非常に長い間経営者をやっておられるからというので、お会いして、いままでのいろいろな恐慌とか大不況とかに比べていまの段階をどう見られるかと聞いたら、いままで自分は七回ぐらい恐慌——まあ、いろいろな意味の恐慌を経験した覚えがありますけれども、今度のは、自分としてはいちばん軽い感じがすると言われるんですね。たとえば、終戦直後の、これは恐慌じゃないけれども、ああいう会社でいえば、賠償で施設はとられちゃう、製品はぜんぜんつくれないかつかれないかわからない、原料はない——そういうないない尽くしに比べれば、いまいろいろなことというけれども、まだまだ恵まれてる、というわけですね。だから、ちよつと、不況下況といつて、戦後そういうことがあまりなかったから、おびえすぎてるんじゃないか、新しい経験かもしれないけれども、けつして珍しい経験じゃないはずだという話をされたんですがね。

大平 そうですね——。

城山 そういう意味じゃ、ある種の楽観論みたいですけどもね。

大平 わたしは、原さんのご意見のように楽天的になれないな。日本経済の存立の条件が非常にきびしく問われておる。これは日本ばかりでなく、グローバルにそうですね。そう

いう中で日本の姿勢と体調を整えていく。どういうように整えていけば、まず名誉ある生存が確保されるのか、長続きが確保されるのか、そういうことが問われておるんじゃないでしょうかね。

ですから、かつて条件がこんなにきびしく問われたことはなかった。いままでは、どっちかというと原さん流の楽観論で通してきたんですが、バベルの塔はもともと高く積み上げられるという考えが支配的だったのだと思いますね。世界を見ても、それは資本主義圏ばかりでなく、社会主義圏もそうじゃないですか。世界的にそうでしょう。したがって、世界全体がいま問われておるんです。

城山 「名誉ある生存」というのはいいことばですね。ただ生きるだけじゃ、それはいろんな生き方があるでしょうからね。

余暇の設計は政治課題

城山 初めからたいへん堅い話になったのですが、ちょっとくだけて、これから余暇社会になりますけれども、ラテン語を少し翻訳して、英語で「レジャー・ウイズ・デイグニ

ティー」ということばがあるんだそうですね。

大平 デイグニティー？ はア——。

城山 単に余暇社会だから遊ぶんじゃないなくて、やっぱり人間の理想はレジャー・ウイズ・デイグニティーじゃなくちやいかんというわけです。これは日本語には非常に訳しにくいことばになりますけれどもね。レジャー・ウイズ・デイグニティー——デイグニティーがあるかないか知りませんが、レジャーは、この前、ゴルフだとおっしゃいましたが、ご自身のレジャーは何ですか。

大平 ——。

城山 本が非常にお好きで、しょっちゅう時間さえあれば本屋に行つて、特に新本屋に行かれるということでしたね。本を読まれることがいちばんのレジャーですか。

大平 ええ。——ただ、レジャーということは、いま、政治のいちばん中心課題になつてきてると思つてます。わたしのレジャー、あなたのレジャーということじゃなくて、全部ですよ。つまり、いま、週休二日制が論じられたり、実践されたり、あるいはもう少しオートメが進んでまいりますと、人間のやることを機械がやってしまうようになるわけですね。もうすでに、東レですか、帝人ですか、無人工場ができたというじゃありませんか。考えること

まで機械がしてくれらるということになってきますわね。そうなってきた場合に、レジャーをどう消費するか、消化するかということとは、人生の最大の問題になるわけです。それで、それは政治にとって最大の課題になってくるんじゃないでしょうか。だから、それは、みんながある家庭の拘束の中で、秩序の中で追っていく。いまのところ、夜はたいした問題は起こらない。昼はみんな職場に行つて、七時間なり八時間なり職場の規則で拘束されてしまふと、たいした問題は起こらない。そのあとで、ビヤホールに行つたり、映画に行つたり、クラスメートとの会合があつたり、恋人とデートしたりという時間が何時間かあるわけです。その時間が、いまは、その程度だけど、ずうつと多くなつていくわけです。そうすると、それをなにかに吸収する装置が必要になるわけです。政治的装置が。

だから、音楽会であるとか、あるいは競技会であるとか、競馬であるとか、競輪であるとか、映画館あるいは図書館——なにか、それぞれのところへ、レジャーをそれぞれ秩序づけて、そこでみんながレジャーを消費するわけです。それで、街には人があまり氾濫しない、犯罪の温床をつくらないというようなことが、政治にとって非常にだいじになってくるんじゃないでしょうか。つまり、いままでは、生産をどう組織するか、消費をどう組織するか、技術をどのように開発していくかというようなことが問題だった。いまは、まさに、レ

ジャーをどう組織するかという問題が、最大の問題の一つになってきた。そういう意味で、それはできたら健全なものであってほしいと思うんですがね。みんなが、非常に気品の高い音楽に親しんで情操を高めてもらえるなんていうのは、非常に幸せなことなんですが、これが、カントの『純粹理性批判』を読めといったら、これはちよつと、みんなノーサンキューでしょう。だとすると、みんながなにもに没頭して、社会的ないろんなマイナスが起こらず、できるだけプラスになるようなことのためにレジャーが消費されるかということ——それが非常に大きな問題になってきたんじゃないでしょうか。

老齡化社会に取り組む

城山 それから、余暇社会になると同時に老人社会になりますね。年齢構成がだんだん老齡化していく。そういう意味じゃ、子供の遊び場もだいじだけれども、もつと老人の遊び場みたいなものをごんごんつくらないといけませんね。いまは不良少年が問題ですけども、将来、不良老年というのが非常に問題になってくるんじゃないでしょうか。

大平 老人問題というのは重要問題だと思うんですよ。

城山 そうですね。ですから、いまなにかというと、すぐ子供の遊び場、子供の遊び場というけれども、そういうながら老人の遊び場はどうなっているんでしょう。たとえば河川敷の非常に安い、老人でも安く手軽に遊べるようなゴルフ場などを、いま、どんどん建設省あたりが取り上げてつぶしてますね。そして、それを子供の広場とか若者のスポーツ広場とかにしていますけれども、ああいうのはつぶすんじゃないかと、あれはあれで残しておき、ほかにそういうものを若者のためにつくればいいんですよ。もっと老人社会のことを真剣に考えるべき段階じゃないかと思うんですけれどもね。

大平 そういうことですね。あなたはまだお若いけど、わたしたちは、もうだいたい老境に入った。(笑)五十五、六歳がだいたい定年ですわね。わしらはもう第二の定年を迎えているですよ。

城山 まだ、これからやってもらわなくちゃならないのに、そんなこといつちゃ困るじゃないですか。(笑)

大平 これから先、どういう暮らし方をするかというのは大問題ですよ、ええ。

城山 広田弘毅は、やめたあとは鶴沼に引っ込んで、ただ本だけ読んで、散歩してというようなことで、十年近く過ごすわけですけれども、ああいうのはまあ、稀有——。

大平 稀有ですね。

城山 まあ、ゴルフが——いつかのお話じゃ、お強いというか、焼酎みたいなゴルフだとい
うので、なんだろうと思つたら、まずいけど強いゴルフだというお話ですね。(笑)

大平 ええ、ゴルフは老人でもできますから——歩くんですからね。

城山 まずいけど強いゴルフというのはどういことですか。まずけりやたいてい弱いす
がね。

大平 まずいというのは、フォームがなつてないといことですね。フォームは見られた
フォームじゃない。

城山 個性的つてことですね。

大平 ええ、個性的。だけど、案外スコアはまとまる。わたしは、そうなんです。まとま
るんですよ。いつも良いというわけじゃありませんがね。

城山 あまり、先生に教わつてしつかりやるといわけじゃないんですね。

大平 そうじゃないんです。自己流なんです。自分でいろいろと工夫するわけです。

城山 流れるような華麗なフォームで打たれるとは思いませんけどね。それにしても、焼酎
のようなゴルフというのはおもしろい表現ですねえ。じゃ、チヨコレートなんか握れば強い

ほうですね。

大平 強いほうです。

城山 あぶないですね、じゃ、握るといふことは。

大平 いやいや、いつでもおともします。

城山 あとは、ご趣味は何ですか。

大平 碁、将棋はいたしませんし、麻雀もしないし、ええ——読書といつても、これも、まあ雑誌のほうでしてね、別に系統的なものじゃございません。そのとき、手あたりしだい読んでおるといふことですね。

城山 本を読むと同時に社会の空気を吸収するということもあるんですね、雑誌とおつしやるのは。

大平 ええ。

城山 お芝居とか映画とか、そういうものにいらつしやる時間は、あんまり——。

大平 それは、あんまりないです。

城山 小唄とか長唄とか踊りとか、そういう日本のなものは——。

大平 それもダメなんです。

城山 じゃ、宴会に行っても、黙って――。

大平 ええ、よく誘われますけども、だいたい小唄とか長唄とかね。歌沢とかなんか誘われちゃあ、用心しないとね、あれは、いつペン聞き始めたら、たいへん時間を食いますからね。愛好者として、聞いてもらわなきゃ意味ないんですからね。ところが、ついいつしよに飯食おうということになつて、連れていかれて、いつまでもそれを聞かされちゃかなわんですからね。(笑)もう、わたしは、ノーサンキューで、なるべくそういう誘惑には陥らんとにしているんです。

城山 お酒は強いんですか。

大平 酒はダメなんです、元から。しかし、宴会なんかでワーワーというのは好きですよ。

如水会々報とクラス会

城山 ところで、如水会々報は、どこをお読みになつていますか。

大平 まず、定例晚餐会の講師のお話ですね。あれは、サマリーですけれども、あれを読ましてもらつております。それから、随想欄でたまにおもしろいのがありますね。それからあ

とは、会員の消息と各支部からの便りを、ちよつと拾い読みしてみたり——それから亡くなられたかたや、そのご家族のことを書いたりしたのがございますね。ああいったものときどき見えます。

城山 ご卒業は何年でしたか。

大平 昭和十一年です。

城山 同窓会、同期会は？

大平 同期会は、わたしのほうは五つありましてね、合同でやるのもありますが、「八鶏会」というものだけの場合もあります。それから昭和九年、十年、十一年でいっしょにやったり、十一年、十二年、十三年でいっしょにやったりする会もあつたりして、ときどき呼ばれます。

城山 ハツケイ会というのは何ですか。

大平 「八鶏会」は高等商業から来た人。昭和八年の入学ですから、十二支ではね、八年の鶏なんですよ。八年に入った鶏どもちゅうんじやないですかね。鵬じやなくて鶏、（笑）「八鵬会」じゃないんだ。たまに呼ばれて、こちら（如水会館）ですきやきをやつたりなんかしてますよ。

城山 いま、同期ぐらいただと、会社にいると、普通はどういうところでしょう。

大平 一流会社の社長になったのが、日本鉱業の鹿野君なんかそうですね。それから大会社では、そうね、こんど三菱銀行の副頭取になった露木なんかそうですね。ああいうクラスですね。だから、専務級、常務級は相当いますけどね。トップマネージャーになったというのは、まだ、そうたくさんはありませんね。これからじゃないですか。ぼちぼち出てくるかもしれない。

城山 そういふ同期生をごらんになって、あつちに行つてたらどうなつたらうとか、あの道へ行けばよかつたとお考えになることがありますか。

大平 ぼくは、銀行や会社に行つとつたらだめじゃないでしょうか。

城山 どうして――。

大平 そんなに気がきいてませんからね。政界では非常に順調に来すぎたんで。そんなに能力がないのに、たまたまいろんな機会に恵まれ、人に恵まれたので、過当な処遇を受けたような気がするんです、わたしは。当然より、過ぎたね、過当な――。

城山 一つはけんかつ早いと実業界はつとまらないから、官界へ――というと語弊があるかもしれませんが、よく、自分は役所ならいいけど、会社に行つたら、とてもつとまらない

ということがあつて、役所に行く人がありましたね、昔は。

大平 わたくしは、この前もあなたと対談で申し上げたように、大蔵次官の津島（寿一）さんが大蔵省に來いというので、それじゃ行きましようというんで行つただけでして、非常に苦悶して最後に官界を選択したというわけじゃないんです。そういう機縁があつたから、それじゃ厄介になるか、ということでした。

城山 それは結果的によかつたわけですね。

大平 ええ、そうですね。わたしとしては悔いはないんです。

上田辰之助ゼミの思い出

城山 ゼミナールはどこを——。

大平 ゼミナールは上田辰之助先生。

城山 ああ、そういえばちよつと似てますね、風格（笑）。茫洋として——。

大平 いやいや、茫洋としてといったって、あの先生は神経細かい方ですよ。わたし——
わたくしもそんなに茫洋としていませんけどもね。あんまり繊細じゃ——（笑）繊細じゃな

いけれども、上田先生は非常に繊細な人でしたよ。

城山 何をテーマにされたんですか。

大平 トーネイね、わたしは先生といっしょにトーネイを読みましたよ。つまり資本主義社会はファンクショナルなソサエティーに持つていかないといけない、ということじゃないですかね、あれ。上田先生はトーマス・アキナスの原典にさかのぼって勉強をされた人で、中世的な職分社会というのか、そういうものが先生の思想の根底にあったんですよ。それで、われわれにもそういうものを読まそうとされたんじゃないでしょうか。ところが、われわれがいかに英語がないかということがね、先生のひと言でわかるんですよ。非常にその点が厳格でしてね、英語というもの、ことばというものに対して――。

城山 非常によくできた人ですね。

大平 ええ、非常にことばはだいにされます。言語社会学者じゃなかったですか、あの方は。言語から入った社会学。ですから、あの方は、英、独、仏はもとよりだけれども、スペイン語から、イタリア語から、中国語から読みましたからね。ことばの天才でしたね。それで、ことばに対して非常に厳格でした。衿を正してあたらないとひどく怒られちゃって。英語の読み方、それから書き方ね、つまり、和文英訳というものをやる場合に、先生の場合

は、いっぺん和文をくだいでしまふんですよ。そこに書いてある思想を——そこに一つの形式をもつて、一つの日本語がありますわね。いきなりそれにぶつかって、それを英語にしようとしなんでしょう。それをいっぺんいろいろにくだいでしまつて、裏からも、表からも、横からもいろいろ見ましてね。それで、この和文は何をいつてるんだとか、何をいおうとしておるんだとか、いろいろなことをまず消化してね、それから英文を考えると、意味で非常に修業になつたですよ。ことばをだいにする。

城山 ことばというのは、いちばんの始まりですからね。

杉村広蔵先生の影響

城山 ところで、当時、一橋には珍しいというか、珍しいという和一橋には悪いけれども、一時期、非常に幅の広い学者というか、つまりプラクティカルじゃない、非常に原理的な、原論的なことを究める、左右田先生とか、三浦先生とかがおられたわけですね。

大平 ちょうどぼくが卒業するとき、学長は三浦（新七）博士でしたね。だけど、あの文明

史は、わたしは実はあまり聞いたことなかったんですよ。偉い人だとは聞いておったけれども、それで学長さんではあられたけれども、あまり直接講筵に侍るということはなかった。教えの庭につくことはなかったんですが、あの人のお弟子さんというか、左右田（喜一郎）さんの——ぼくらのときは左右田さんはすでに亡くなられておりましたから。

城山 福田さんはいかがでした。

大平 福田さんも亡くなられておりまして、福田さんのお弟子さんにあたる中山伊知郎先生が新進の助教授でね。ちょうど『純粹経済学』を世に問われたところで、講義を聞きました。それから、左右田さんのお弟子になつてる杉村広蔵——この人の講義には行つたんです。しかし、わたしは科目としてとらなかつたですよ。むずかしくてわからないんです、先生の経済哲学は。それで、それを選択して試験を受けるといふ気持ちにはなりません。ただしかし、わたしは好きでね、わからんながら杉村助教授の講義にはたびたび行つたですよ。しかし、杉村先生の教えをほんとうに受けたのは、卒業してからです。

城山 そうですか。どういう形で。

大平 卒業したあとで、岩波から『経済倫理の構造』というのが出たんです。あれが先生の博士論文。それよりちょっと前にやはり岩波から『経済哲学の基本問題』が出ていました。

つまり、経済哲学の基本的な著述が相次いで出たわけですね。わたくしは、逆に、経済倫理から入って、経済哲学の本を涉獵したんです。その間に先生は亡くなられたんですよ。だからぼくは、非常な英才を日本は失なったと思いますよ。非常にすばらしい学者だったと思うな、あの人は。それはもう何回もあの人の本を丹念に読みましてね。それで、わたしの思想というものが仮にあるとすれば、それをつくるものの考え方の素材になっておりますね、杉村先生の思想は。

城山 いまの若手の経済学者の多くがそうですが、非常にオペレーショナルな、プラクティカルなものばかりが発達して、それがまた実際に役に立つかというところ、ほとんど役に立たなくなっているんですね。そういうのを見ると、経済哲学というのは、一時、時代遅れみたいな感じがあつたけれども、いまになってみると、結局そういうものが残るみたいですね、感じとして。いまの経済学者の多くは、ほんとうに経済学のパンとしたシステムとかもの考え方があつて経済学者なのじゃなくて、非常に重宝に経済問題について発言するから、経済学者なんです。そういう意味じゃ、原理的なのとか、そういうものの考え方というのはだいたいなんでしょうね。でも、直接には、それは会社に入っても役に立たないし、もちろん政治でも役に立たないけれども、そういうものがないとだめですね。じゃ、相当勉強なさつ

たんですか、学生時代——。

大平 学生時代はよくわからなくて、卒業してひもといってみて多少は匂いをかぐことができたと感じるんです、杉村哲学は。とても入り口をウロウロしておった程度だと思いませんけれども。

城山 確かにむずかしいですね、杉村さんの本というのは。ぼくもちよつと読みかけてやめた記憶があります。わりあい哲学は好きだったんですけど、杉村さんの本というのはむずかしいですね、エッセンスの上で書かれてるみたいで。

大平 そうそう。

城山 エッセンスのエッセンスみたいだから——。

大平 やっぱりあの人は天才だったですね。確かに天才だ。群を抜いたような気がするよ、ぼくは。しかし、ああいう人は意外に天折するんでね。もつと生きとつていただければ、ずいぶん日本のためになった人だと思っけどね。

一橋の体質と如水会

城山 大蔵省に入られてから、いろいろ東大出のエリートたちと接触が多かつたんでしょうけれども、東大出と一橋出の違いみたいなのですね——。これは、ぼくは石原慎太郎氏なんかともよく話をしたんですけれども、一橋出というのはこじんまりとまとまって、とにかく適応力はあるし、ある仕事を任せればやる。そういうところはあるけど、どうも野性がないんじゃないかと。東大の人たちは、仮に出来不出来はあるにしても、みんな、野性というか、馬力というか、そんなものがあると——そこはかなり違うんじゃないかという話をしたことがあるんですけれども、そういうことはお感じになりませんか。

大平 東大というのはね、一つの大きな社会です。一つの学校というよりは、一つの社会というような、一つの教育社会、あるいは学問の社会という非常に大きなキャンパスなんですよ。ね、あれ。やっぱり、一橋は単科大学で、経営、経済とか、商業とかいうような、あの意味で昔の高等商業的、職人的、町人的、そういう小さい社会ですよ。だから、育ちが違ふんですね。

だから、東大の人のほうが寛大ですよ。寛大というか、物事にあんまりこだわらない。つ

まり、母校に対する意識もね、比較的稀薄なんですよ。八畳の中でおると、二十畳の中でおると違うようなものでね。なんかこう、母校という意識が一橋の場合は非常に強烈です。これ、いい面もあるんですよ、確かに。ぼくなんかそれで非常に助かってるんですけどね。ぼくは東大出ておったのでは、今日ないですよ。つまり、一橋に助けられたわけです。いろんな意味で助けられた。それはなんとすれば、非常に強烈なスクール・ファミリーという中におけるわけですよ。東大の場合は、そんなこと、たいしてこだわらないということを、まず第一に感じますね。

それから、付き合ってみて、そういう意味でずいぶん友だちができました。その人たちの人間性に接して、ますますそういう感を深くしますね。だから、いい悪いでなくて、そういう違いはあるんですね。しかし、そういう一橋的なものがあっていいんですよ。日本にはそういうものがあってもいい。東大的なものもなければ、やっぱり「花は紅」でいいんじゃないですか。妙に東大のまねせんでいいと思うんだ、ぼくは。一橋は一橋でユニークな個性をできるだけのびのびと出していきやあいんじゃないでしょうか。それが日本の社会を多彩にしていくんでね。

城山 わたくしの場合も、振り返ってみると、ゼミナールは、わたくしは山田雄三先生につ

いたんですけれども、一学年十五人で、ほんとうに真の底から学問とは何かということを三年間みっちり教えられました。まあ、山田先生の経済学も、いまのはやりの経済学とは違つて、個と全体との関係は何かというような、ある意味で哲学的な発想から来てるわけで、そういう意味で、わたしは経済から文学に転換する場合でも、やはり個と全体との関係は何かということも文学のテーマですから、非常に転換しやすかった。

また、わたくしもずいぶんゼミナルでは謀反を起こして、弟子のくせに山田先生に絶縁状を叩きつけて、飛び出したこともあるんですよ。それは、経済学に対して、過度の期待といますか、社会改革的な非常に血の熱いものを期待していたところが、近代経済学ですから非常にクールですね。そういうものにたまらなくなつて、わたくしはこういう経済学についていけないからといって——。しかし、そのときも、山田先生にじゅんじゅんと、あなたを無理に引き止めない、しかし、自分はこういう考え方を経済学について持つている、ということ——つまり、個と全体との関連を追い詰めていくんだという話を伺つて、「しかしあなたは自由だから、どうぞお行きなさい。それでもなおもう一回やる気があるなら、また来なさい」といわれました。だから、わたくしはそういう意味では、生涯、山田先生に頭が上がない。

そういうことは、やはり、一橋という、一つのサークル十五人という非常にきめの細かい、ほんとうに一人一人の人間をじっくり見詰める場に置かれたから、ああいう非常にいい師にめぐり会えたわけです。しかも、生涯、頭の上がらない人と。そこから先を、そういうものを踏まえてどう生きるかというのは、それぞれ個人の課題だと思えますね。ですから、ただ一橋を出たということで、いまおっしゃいましたけれども、いろいろな意味で、村の中の平和みたいな形で、いろいろな形で応援されるということに甘えてはいけないということですね。

大平 甘えちゃいかんです。わたしは自分の生涯の貸借対照表とってみたら、何を一橋というコミュニケーションに与えたか、何を受けたかというバランスをとってみたら、受けたほうがいいですね。与えたものはあまりないですね。やっぱり、あなたがいう、これまで相当甘えてたと思うんだ。で、まあ、これから多少なりともお返しをせな相すまんと思っています。

(笑)

城山 まあ、「如水会」じゃないけど、「君子の交わりは水の如し」だから、あまり気にされないで――。

尊敬する人物——吉田茂

城山 ところで、話を交えまして、学校時代は、そういう意味では上田先生とか杉村先生とか尊敬なさる方があったわけですが、もっと長い目で見て、たとえば歴史上の人物で非常に興味をお持ちになるとか、尊敬される人物はどんな人でしょう。

大平 歴史上の人物というと——そんなに、たいしてぼくは歴史は知らんから、(笑) まあ、日本の最近の状況の中で接触を持った人ということでしょう、わたくしは、吉田茂さんにひかれるものがありますね。

城山 はあ、どういふ点——。

大平 吉田さんという人は——一つはあの人の勇氣。

城山 それは新聞社のカメラマンに水をぶっかけるような勇氣——。

大平 つまり、非常に個性の強い人で、相当傍若無人なところがありました、傍若無人だけれど、しかし、あの勇氣はりっぱだと思ふ。ぼくらはどうしてもまねられない。なぜ勇氣が出るかという、彼が正しいからです。彼は、おれはこれが正しい行き方だと、こういうことに揺るぎない信念を持つてゐるからね。ああいう勇氣が出るんだろうと思ふんですよ。そ

れから、彼は清潔だと思ふんですよ。精神的にも物質的にも非常に清潔な、それがあつたら
勇氣が出たんだろう。そういう点で、ぼくは、あの人は一つの範とするに足る人物だと思
ふな。

それからあの人は、それでいて小さいことに非常に神経を使つた人ですよ。たとえば、自
分がいっぺん恩義を受けた方、その子供さん、そのお孫さん、そういう方のことをたいへん
心配してゐるんですね。その人の幸せを祈つてゐるわけですね。だから、そういう人から何か頼
まれたとなれば、じつとしておれないんですね。池田（勇人）さんのところへは吉田さんの
手紙が行李一杯ぐらひありますけれども、池田末亡人は、その手紙をずっとだいに、家宝
にしておられる。その手紙の大半はね、天下国家のことはもちろんありますよ、あるけれど
も、非常に小さいことで、この人からかういふ願ひがあつたが、これをできたら聞き届けて
やってくれんかという——きわめて些細なことでも、きちんと巻紙に自分で書いてね。「池
田首相閣 下吉田茂」とね、ちゃんと封書でやつてくるんですね。人間関係を非常にいいか
げんにしないで。

それから、よく本を読んでおつたんですかね、話題はきわめて豊富だし、それから非常に
リファインド・ユーモアが、もう話題の中にあふれてゐるんですね。あれは非常に勉強して

おったと思いますね。そして、先生はなにかにこだわっていないという。なにかにこだわると、たとえば権力とか、金力とかなんとかにこだわっておったのでは、あの涼しいユーモアは出ないと思う。そういうものをあの人は持っておったと思いますね。

城山 わたくしは『落日燃ゆ』の中では、広田弘毅が、同期生でありながら、自ら計らわぬ。吉田茂のほうは徹底的に自ら計らうと書きました。あの場合は、たとえば奉天総領事のポストの問題とかいろいろなことがあります。息子さんの吉田健一さんが書いておられるのを見ると、父は確かに出世を求めた、出世を求めたけれども、それは出世しなくちゃ仕事ができないという信念があったから求めたんだ、という意味のこと書いておられますね。そういう意味では、臆面もなしにポストを求めた。ベルサイユ講和条約のときでも、牧野伸顕のところへ頼みに行つて、秘書になつてついでに行くわけですね。あの、ある意味での臆面のなさみたいなものですね、あれはあそこまで徹底すると、りっぱだという気がするんですけどね。

大平 ぼくもそう思いますよ。あなたのあの『落日燃ゆ』も読みまして、広田さんと吉田さん、どちらも非常にりっぱだと思いました。広田さんは広田さんなりに、ああいうのは得がたいパーソナリティーだと思えますが、吉田さんも、なにもいたずらに地位を求め、権勢を

求めたとは思いませんね——なにかをやるためだということで、そこをなにも恥じらうことなく、おれを次官にしろといつて行く。ちよつとできない芸当だと思いますね、あの勇氣は。

城山 やつぱりあそこまで徹底するというのは、一つの人間の魅力ですね。ああいうのを書くとき、吉田さんの信奉者から、吉田さんの神話をこわしたみたいにいわれるんですけど、わたくしは、あれは吉田さんの人間復活だと思ふんです。あれは人間的な魅力ですからね。変になまはんかにつかず離れずみたいなことするよりも——。

大平 それから、吉田さんは非常に小事に利用されたと思うな。吉田さんがこういったとかああいったとかいうことで、権威づけて、それでなにか事をなそうという場合に、吉田さんは利用された。吉田さんはあまりそういうこと考えていないんだ。ところが、そういうことに遭つたケースが二、三ありますね。大平はどう考えてるんだということを聞いて、ぜんぜん違ふじゃないかというんですね。そんなことにこだわつてないということを確かめてね。だから、えてして歴史というものにはいろいろ、真実じゃないことが残るんですね。

城山 台湾をめぐる吉田書簡問題などというのもそうなんじゃないですか、中国問題で——。

大平 あれは池田さんに頼まれて、吉田さんが、いつペン、じゃ、台湾に涼みに行こうとい

うことになった。池田君も困ってるじゃろうに、行ってこう——というだけの話で、書簡の中に何を書いてあったかは——ご本人はともかく書簡の中に何を書いたかとかなんとかいうことではないんです、あれ。いっぺん、おじいさん頼みますよ、といわれたら、それじゃ、いっぺん行って涼んでくるよ、といっただけで行かれた——そのことがだいじなんで、携行した書簡は別に——ご本人、署名をどうされたかどうかはそんなことたいして気にしてないんじゃないの。

城山 それがあとでいろいろ利用されたとか——。池田さんも魅力があるんですけど、吉田さんのほうがスケールが大きいですか。

大平 それはダンチに大きい。

城山 いつかおっしゃってしまいましたけれども、池田さんは非常に愚直なところがいい。しかし、ちよつと細かすぎるみたいなのがあると。

大平 いや、愚直だからそうなんです。そこを大きく離れられないところ、突つ放すことができない、そういうものはやはり愚直だからだと思えますね。それはそれとして一つの生き方ではあったと思いますがね、豪傑ではなかった。吉田さんというのは豪傑的要素があったな。

大蔵大臣というもの

城山 財政家ではいかがですか。いま大蔵大臣のお立場からごらんになって、大蔵大臣では――。

大平 歴代の大蔵大臣ねえ――。

城山 だれをいちばん評価なさいます？

大平 ちようど、わたくしがね、大蔵大臣としては五十番目なんですよ。五十人おったわけですね、日本の内閣制度ができてから。その中で“何々財政”という財政に固有名詞をつけて考えるということは、わたくしはとらないんです。というのは、そのときの日本の状況の中で、どう予算を組み、どういう金融政策をやるか、どういう為替政策をやるかということですからね。その状況がどうであれ、自分が出ていったらこうやるんだ、なんていうのはおちやくちやだと思う。状況に合ったことをやらないといけないものだと思うんです。で、それぞれの大臣がそれぞれの状況でそれぞれの判断をして、いいか悪いか、ともかくやってきたんじゃないでしょうか。だから一概にだれが偉いというのは、わたくしは財政政策という角度から評価するのはちよつとむりじゃないかと思えますがね。

しかし、人間としてどういう方が魅力があるかというなら、それは好みによっていろいろ

出てくるんだらうと思えますけどね。ただいえることは、大蔵大臣とか日本銀行総裁というのは、一種の日本の信用の基礎だということですね。日本の日本銀行券に象徴される信用を代表する人が、大蔵大臣とか日本銀行総裁なんです。したがって、非常な財政学者でなければならぬとか、経済通でなければならぬとか、国際通でなければならぬとかいうものじゃないんです。あの人がやっておるんだから、まず大きな間違いはないのではないか、という信頼、そういうものがあれば大蔵大臣は務まるし、そういうものがなければ大蔵大臣というのは、もうぜんぜんアウトでしょう。なんぼりつぱな財政理論を持つておつても、国会答弁がうまいとか演説がうまいとかいつても、それはダメだと思えますよ。

城山 そうですね。そういう技術の問題とか表われ方の問題ではないということですね。

大平 だから、高橋是清さんが何回か大蔵大臣をやられて、あるいは総理大臣を終えてからまた大蔵大臣になられたりしたが、あの人が大蔵大臣ということになると、国民がまずひと安心したんじゃないだろうか。国民の各層が、まあ、このダルマさんがどつかと座つてくれたんだ、ひどいことはあるまいよ——と、なにかそういうものがあつたんじゃないでしょうかね。

城山 そのために、自ら総理になつたあとでも大蔵大臣になりましたね。

大平 そういふものじゃないでしょうか。だからそういう意味で、大蔵大臣とか日本銀行総裁なんていうのは、よほどしめてかからんといけないんじゃないでしょうかね。もつとも、政治の要職にある者は、みなそうですけどね。経済のいちばん基礎になる信用。その信用とのつながり——。

城山 だから、状況が荒療治を必要とするときには荒療治をしなければならんし、はでな治療を必要とするときは、はでな治療をしなければならんけれども、きめ細かい治療を要するときにはきめ細かい治療をする。ただ、はでにやったから、あの人はなんとか財政というふうに出てくるのは、結果論でしかないことですね。この前、非常にきめ細かく、地味に控え目に、何々しない、ということ貫かなければならんのだ、ということをおっしゃいましたね、現在は。つまり、抑さえること——そういう非常に地味なことをする、そういうことを要求している状況だということですね。

大平 ええ、そうです。

内閣と各省

城山 ところで、なにか、マスコミの一部が変なことを書き立てていましたね。大平さんがじっとしていらつしやるものだから、案外、財政のことをご存じないんじゃないかというところが、ゴシップ風に書かれているのを、最近、見たことがあります。しかし、ぼくは、へたに器用に動き回ったりなんかしたら、むしろ危いんで、そういう意味じゃ、ドンと重い文鎮みたいに乗っかっておられることのほうがだいじじゃないかという気がしますね、外から見ても。

それから、外から見ている、どうも、内閣というのがよくわからないんですが、省内の局長あたりが総理と直結していろいろなことをバンバン進めちゃうという空気は、ちよつとおかしいんじゃないでしょうか。いま、それがあるかないかは別としましてね。また、そういう人間のほうが、変なふうに大物視されたりする空気があつたりするんですね。なにか、そのへん、いまの状況はちよつと異常じゃないかと思うんですがねえ。

大平 わたくしは、内閣官房長官なんかやった経験から申しましてね、内閣は「無」でなければならぬと思うんです。無ですね、無というのが、いわば、西田（幾多郎）哲学でいうよ

うに、有を限定するんですね。よくわからんけども、無でなければ有を限定できない。内閣が、各省と相対的な有の立場になると、相対理論的な立場になりますから、これ、アウトなんです。内閣は、無でなければならん。無であって初めて、有をコントロールできる。これは西田哲学の基本じゃないですかね。

で、わたしは、官房長官時代に、内閣は仕事を持つちゃならん。有司百僚がおるわけですから、それに全力投球してもらおう。で、事が出てきたら、まずあなたが、これは全力投球してこの問題进行处理していきなさい。国務大臣並びにその後におる有司百僚におりおりお頼みなさい。そうするとみんなが一生懸命になるわけですと池田総理に言っていました。内閣がある立場をとって、内閣の意見と各省の意見が対立するということになったら、これはえらいことだね。内閣のほうが強いんだから、世間はみんな内閣に行くわけです。そうすると、各省は寝てしまふ。内閣で、みな偉い人が相談してやっておるんだから、われわれには相談がないんだから、それじゃわれわれ適当にネンネしとれ、ということになると、本当に各省は寝てしまふ。内閣だけが、もういろんな仕事を抱えて八面六臂で、あれにも気を配らないかん、これにも気を配らないかんということになると、ぼくは政治はめっちゃめっちゃだと思ふんです。だから、内閣はぜんぜんクールでね、「無」であるべきだと思う。各省が一生懸命

になつてやつておるといふ状況をつくるんです。

その点、池田さんとは毎日それをやつておつたわけです。「総理、これ各省にやらせましょう。こうやらせようじゃありませんか」と言う。そうしたら、池田さんは、「いや、きみ、そんなこと言うて、いまじつと見ておれん」。(笑)あの人は非常に経済政策に詳しいから、「あれ、ほつといたら、きみ、心配じゃないか。あれを呼べ」「総理、そんなこと言わんで、あれは全部大蔵省にお任せしましょう。通産省にお任せしましょう。それで、あなたはかしわ手打つて、天地神明に、今日一日、日本国が安泰であるようにお願いしておられたら、総理大臣、それでいいんですよ」。すると「なに、きみは経済もろくすっぽ知らないで、なまいきなことをいうな」。(笑)ずいぶん怒られたもんですよ。しかしぼくはね、「総理、そんなに心配せんで、みんなにやらせましょう」ということで、ずいぶんやり合つたことがある。干渉した結果は、あんまりよくない。任せきつた結果は、案外いいんですよ。それだと思ふんだ。

それで、いまの田中(角栄)総理も、若干、池田さんと似た性格があるんです。本人、非常に気をもんでいましてね。まあ、財政・経済も詳しいし、大蔵大臣も長い間やつておつたし、通産大臣もやつておつたし、財政・経済・産業ばかりでなく、いろんなものを、よう

たくさん知ってます。手に負えんぐらい知ってますよ。だから（笑って）各省の次官や局長相手に一人でやりたがる。ぼくはね、それは、あんまり賢明じゃないと思います。田中さんも、やっぱり一応の事情は聞いてしかるべきだと思っただとも、直接アクションはとっちゃいかんよと言っんです。「いろいろの事情は、きみ、聞きたいなら聞いたらよからうけど、大蔵省のことは私に任せなければだめだ、各省のことは各省大臣に任せておいてくれなきゃ、仕事にならんよ」と、それは、よく、ぼくは念を押しています。だから、あんまり気にしないんですよ、ぼくは。

城山 内閣はクールでなければならん、というのは、たいへんいいおことばですね。

大平 内閣ばかりでなく、上に立つ人はそういう覚悟がいるんじゃないですかね。そういうような感じがしますね、トップマネージャーは。

城山 わたくし、ちよつと、いま、通産省を舞台に小説を書いているんですけども、感じとしては、だんだん、内閣のほうの有になつて通産省のほうは無になつてくるみたいなんです。つまり、官僚機構のほうはだんだん無になつてます。

大平 それは良くないです。

城山 政党内閣がうんと長く続いているからというんで、だんだん官僚の側が押されてくると

いう感じになってますね。しかし、なんとかしなくちゃいけないですね。やっぱり官僚機構というか、百僚有司の力を殺すのと生かすのとはずいぶん違いますからね。それにそういつちや悪いけど、大臣がすべてオールマイティーで、非常に見識もある人ばかりとはいえずなくて、ずいぶん粗製乱造の大臣もありますからね。

戦前の国立と先生たち

大平　ところで、わたしは、今年の春、エール大学が学位をくれましてね、名誉法学博士でしたけど、それをもらいに夫婦でニューヘブンへまいりました。ニューヘブンの持つてる感じは、全体が大学町なんです。町全体が大学という感じ。大学の校内を走っておる道路が一般の市道ですからね、大学の中に町があるともいえるし、町の中に大学があるともいえる。それから、六百五十万冊とってましたけれども、たいへんな図書館ですね。すばらしい。すばらしい環境で、うらやましかったですね。日本の場合は、ああいうぜいたくなことはなかなかできない。大学町といえば、戦前の国立では、ぼくらは、いも掘りに行ったことのあるな。まわりが全部、野っ原だった。

城山 そのいも畑が、いま、団地になつてゐるんです。国立に大学が移つたころは、坪二円で先生がたが買つてくれ、買つてくれといわれていたんですがね。しかし、なかなか坪二円なんて出せるものじゃないといつて、買わなかつた人が多かつたという話です。

大平 日本興業銀行かなんかの運動場があそこにあつたと思いますが、あれはあるんでしょうな。近藤荒樹さんが、あそこにテニスコートを持っていますね。

城山 先ほどゼミが上田先生というお話でしたが、米谷先生だつたという説もあるのですがね。

大平 客員なんです。米谷隆三先生とわたしは、わたしが学生時代、先生は洋行しておられて、三年のときに帰つてこられたんです。それからわたしは先生と親しくなりましたね。おまえは、わしのゼミナリステンじゃないけれども、それと同様に取り扱うということになつたわけです。だから、わたしは米谷ゼミの会合にはしょっちゅう行つてゐるんです。隆門会ちゅうのがありますね。

城山 それでゼミナールは米谷さんではないかということになつたわけですか。

大平 本当は、そうじゃないんです。先生はほとんどおられなかつたんです、あのころは。わたしの卒業ちよつと前に帰つてこられて、当時、田中誠二先生が会社法、手形法は本間喜

「先生、米谷先生はまだ正規には商法の講座を持っておられなかったのです。したがって、ぼくらはあの先生の講義は聞かなかったんですが、まあ、ともかく、びしびし指導を受けました。こわい人でね、気概のある人でした。」

城山 ほとんど図書館にこもりっぱなしで、勉強ばかりなさったということも、同級生の間で言われているようですが……。

大平 それは間違ったことで、とんでもございません。図書館なんか、あまり行ったことなかったです。(笑) 恥ずかしいけど、そんなに行ったことなかったです。

城山 しかしいま杉村先生の本はないでしょうね。経済倫理の本というのは見たことないですね。

大平 『経済倫理の構造』——岩波で、いい本です。実にすばらしい。わたしは(自宅が火事で焼けた時に)燃やしちゃいましたけどね、非常に残念ながら。みんな持ってましたけどね。わたし、何回も繰り返し繰り返し読みました。

城山 毛沢東からもらったものだけ——。

大平 あれは、本じゃなくて字ですね。骨董屋が貸してくれというから、貸してた間に助かったやつたんです。

城山 それまで、ずっと杉村さんの本はあつたわけですか。

大平 ありました。左右田先生の本が最近また岩波から出ましたね。

城山 杉村先生の本は、かみ砕いていまの世の中にあてはまらないですかね。かみ砕くのはたいへんでしようけれども、もう少し啓蒙書みたいになりませんかね。

大平 啓蒙書になります。たとえば、カントをどう見るかとか、マキャベリをどう理解すべきか、ちゃんとありますよ。マキャベリなど、杉村先生は権謀術数家であるなんていう解釈はしておられませんよ。すばらしいです。やっぱり国家論から、杉村先生は杉村先生なりの見方をされていた。われわれは、非常に頼りない、明日を知らない運命の中で生きている。しかし、われわれは平和を求め、愛を求め、善を求め、いろいろなことをするけれども、それは非常に頼りない、ぜんぜんあてにならない、非常にフォルトナーな世界の中におる。だから、善に達しようと思えば、全身全霊を込めて、いろいろな手段、術策を組織しなくてはならない。それをネセシタというんですね。手段、必要をネセシタという。それで、ビルトウスですか、徳に至る。だから、フォルトナーとネセシタとビルトウスという関係にあつて、われわれは、何をし、何をしちやいかんかというわけです。マキャベリはビルトウスに達するには、こういうことをしなくてはならんと言っているのだが、その手段だけをとらえ

て、世人は権謀術数などいつているが、これは間違いだ、彼の哲学はもつと崇高なんだ——と、まあ、簡単にいうとそういうような考えかたですね、杉村先生のマキャベリ論は。

それから、カントについても、先生は小さい単行本を出しています。カントを先生なりに理解して、非常にやさしく解説しています。三省堂だったと思いますがね。それから、資本主義は何かとか、社会主義は何かとかいう基本の問題も問われている。いまわれわれが問題にしているような問題は、先生の哲学には、ちゃんと書いてあるんです。

城山 もう一回あの『経済倫理の構造』が出ると思いますね。

大平 あれはやっぱり岩波から出してもらいたいな。山田雄三先生に言いなさいよ。中央大学の武藤光朗君が弟子じゃなかったかな。ぼくらの同級では、長崎大学の柳田君かな、長崎高商の教授になって行った柳田君が弟子ですね。あの当時、何人かいました。非常にゼミナリストンが少なくてね。わたしどものときで幾人おったかな。武藤君なんか、われわれよりちよつと後ですけどね。

城山 いま、経済哲学の講義はないのかな、一橋には。このお話がきっかけになって、経済哲学の講座ができれば、きょうのお話は実り多いということになりますね。

城山 三郎（しろやま さぶろう）

（1927年—2007年）愛知県出身。大日本帝国海軍に志願入隊。海軍特別幹部練習生として訓練中に終戦を迎えた1952年一橋大学を卒業。経済小説の開拓者、第一人者として知られ、直木賞や朝日賞、芸術選奨文部大臣賞などを受賞。ダイヤモンド社主催の「城山三郎経済小説大賞」が設けられたが、第4回（2012年）で終了。2014年新たに「城山三郎賞」（主催・角川文化振興財団）が創設された。『落日燃ゆ』、『男子の本懐』、『官僚たちの夏』、『指揮官たちの特攻』などの多数の作品がある。

橋畔随想 保守の哲学

幹事長時代、「保守の危機」が叫ばれているなかで、国民の価値観の多元化に応えるための「未来と過去が緊張したバランスの中にあるように努めていく健全な保守主義」の重要性を力説。『如水会々報』（昭和53年2月）所載。後に『在素知賢』、『大平正芳全著作集』5巻（講談社）に収録。

先日、妻を連れて墓参りの帰途、国立の母校を訪れた。図書館にあるわが国商業英語の鼻祖ブロックホイス先生の胸像の下に刻まれている、ゼミナールの恩師、上田辰之助先生の碑文を、日本経済新聞の「私の履歴書」欄にご紹介しようと思ひ、それをもう一度確かめたかったからである。

上田先生の碑文は、ブロックホイス先生の貢献と、一橋の学校としての使命を次のように簡潔に記している。

"His was a mighty workshop in which he devoted his life to the training and equipment of the men who won for Japan autonomy and distinction in her commerce with the world."

この碑文からもわかるように、日本の貿易は過去百年間、F・O・BからC・I・Fへの歩みであり、国際収支の恒常的赤字からの脱却の道であった。一橋の先輩たちは、そのために血のにじむような努力を重ねてきたのである。国際収支が赤字になれば、国内経済を引締め、国際収支の回復に努め、国際収支に余裕ができて、用心深く経済の拡大に努めた。その結果、ついこのあいだ、日本は漸くにして資本輸出国になることができた。その途端に、日本は大幅黒字国として国際的批判にさらされることになったのである。まことに時の移り変わりの激しさは目を見張るばかりである。

時の移り変わりといえ、戦時中に愛読した田辺元先生の哲学書の中に「時間というものは今しかないのである。過去や未来は現在に働く力であつて、時というものには現在しかない」という意味のお言葉があつた。近時、「保守の危機」ということがいわれるが、「過去を捨象すると革命になり、未来を捨象すると反動になる」というのが田辺哲学の教えているところだと思ふ。現在は、未来と過去の緊張したバランスの中にあつて、革命であつても困るし、反動であつてもいけない。未来と過去が緊張したバランスの中にあるように努めていくのが、「健全な保守」というものではないであらうか。私は保守主義をこのように考えている。

いま国民が望んでいるのは、「いまの経済を早く軌道に乗せること」つまり「現在は我慢がならぬ。現在は不都合だから、これを正しい軌道に乗せ得ない政治は許せない」ということであろう。しかし、私は、「果して現在の状態はそれほどつまらない状態であるか」を、もう一度よく考えてみる必要があると思う。われわれはこれまで、現在を生むために血と汗を流した。現在はそうした丹精の結果である。このことをまず考えなければならぬ。

それ故、私は、政治の無力さを感じながらも、現在の状態をもたらした責任を、挙げて政治にもつていくことには多少の抵抗感を覚える。というのは、われわれは、この現在の状態を多くの可能性の中から一番よいものとして選択したはずだからである。

もちろん、現在を漸進的により方向に向かって直していく努力は重ねなければならぬが、とにかく抽象や飛躍に走ったり、逃避したりすることなく、巧みにバランスをとりながら、現実にして手固く政策の選択をしていくのが健全な保守なのである。

よく「西ドイツの世論は政府に甘い。日本の世論は政府に辛い」といわれるが、果して日本の政治は西ドイツに比べて劣っているかといえ、必ずしもそうではないであろう。それぞれの国民によってその国の政治の評価は異なるのであって、一概にどうということはいえないと思う。また、政府に対する世論だから政治を評価するのは適当でない。

ともあれ、いまの時代の政治は、これまでのどの時代の政治よりも難しく、評価もよくないように思われる。その最大の原因は、国民の価値観が多元的になったため、その全部を個別に充足させてやれなくなっているところにある。これは体制のいかんを問わずにいえることで、いずれの体制下でも世論をまとめることは至難のわざになっている。

要は、政治が毅然とした態度で時代に対応できるかどうかである。

日本は、これまで民主主義のやり方で曲りなりに成功してきたし、議会主義も何とか定着してきた。経済についても、市場経済のやり方が無難であるという考え方が熟してきたし、巨額の防衛費も使わないで国の安全を保障することにも成功してきた。

政府の仕事は、まず、このような「大きな基盤を守る」ことである。その上に立って、経済界はじめ各界は分別をもって現実に対応するのである。政府は経済界などができないこと、例えばカタストロフィ的な状態を回避することをやる。これこそ政府でなければできないことである。そうした経済と政治の究極のかかわり合いを考え、政治の限界を思いつつ、現実に対して有効な手を打つことが肝要である。

それにつけても、経済と政治のかかわり合いを考える上で、私は一橋という学校に学んで本当によかったとしみじみ思う。また恩師、先輩、親友に恵まれ、幸福である。私は昨年、

衆議院議員在職二十五年の故をもって、院議により表彰された。政界に出て何とかここまでこられたのも、一橋の恩師、先輩、同輩、後輩の皆様のお蔭であり、心から感謝に堪えない。

エール大学と私

ニューヨークのジャパンスサエティ総会での講演後、エール大学で名誉学位（法学博士）を授与された際のエッセイ（昭和49年5月31日執筆）。2回目の外務大臣時代で、日米首脳会議、日中国交正常化案件、国連総会出席、石油危機問題等で立て続けに訪米して多難な外交をこなした後の訪米であっただけに、大平にとって数少ない心安らぐ外遊であったことが読みとれる。この名誉学位を授与された先人のなかには、西独のアデナウアー、ブランド両首相、国連のハマシヨールド、ウ・タント両事務総長が、日本では伊藤博文公がおられる。『風塵雑俎』に所載。後に『大平正芳全著作集』4巻（講談社）に収録。

私は、一九七二年七月、再度外務大臣を拜命して以来、すでに五回訪米している。日米首脳会談のために二度、一九七二年十月には日中国交正常化の経緯説明のため、一九七三年の九月には国連総会出席、そして最近では一九七四年二月の国際エネルギー会議参加のため等

である。そしてその何れもが、重い荷物をかついでの旅で、心身ともにくつろいだ気持ちを楽しむことができるものではなかった。

ところが一九七四年五月の訪米は、ニューヨークのジャパン・ソサイエティの年次総会における講演と、エール大学から名誉学位（法学博士）を受けるためのものであった。当面、日米間に重苦しい問題や切迫した事件もなかったため、わずか五日間の滞米ではあったが、それは珍しく気軽で楽しいものであった。それに滞米中は終始快晴に恵まれ、存分に清潔な新緑を楽しむこともできた。

五月十八日（土）の午後ニューヨークについて私は、日本商工会議所主催のパーティーに出た後は、ようやく整備された総領事館の公邸でゆっくり休養をとることができた。沢木総領事夫妻は、ある素封家から買い受けることができた公館を誇りにしていたが、その内装には随分苦心していた。私達夫妻は、その新しい公館の客となり、総領事館の幹部夫妻と食卓を囲んで春の夜を心ゆくまで楽しんだ。

翌十九日（日）は、マンハッタン島を縦断して、ハドソン河に沿って北上し、途中で右折してニューヘブーンまで素晴らしいドライブをした。沿道は滴るような緑に覆われ、ドッグ・ウッドの花が咲き乱れていた。沿道の森や湖沼は静かで、その中に点在する住宅も、決して

豪華なものではないが、緑に映えて美しく清潔でもあった。

途中、とある沼畔のレストランで簡単なビュッフェ形式の昼食をとった。天井の低い古い木造家屋で、どの調度も古いものばかりであった。何でも二百年程前にこの地に移住して来たイギリス人が建てた郵便局を軸として、次々に無造作に建て増して行ったものだという。日曜のこととて、大勢の来客があつたが、故トルーマン大統領もここによく見えたという。主人に案内されて地下室に入つてみると、沢山のブドー酒の瓶が横倒しのまま無造作に積まれてある。その中で一番高価なものはこれだといつて、手にとつてみせてくれたが、たしか一九五一年のもので一本の値は四百五十ドルという超ど級の逸品であつた。ブドー酒は、年によつてそんなに出来、不出来があるようだ。

夕刻ニューヘブンの郊外の小さいホテルに辿りついた。ニューヘブンの街は、そこに所在するエール大学の卒業式に出席する父兄が全米はおろか全世界から集つており、ホテルというホテルは満員だったので、私選は郊外に止宿した。空はいよいよ高く、山はいよいよ青い。水はいよいよ清く、風は至極和やかで、郊外の景観は何とも素晴らしい。

夜はエール大学の総長夫妻招待の晩餐会があつた。それより前、日本歴史の権威ホール博士のお宅でパーティーに招かれた。その席には、同大学の日本研究者と、日本人で同大学の

教授をしている方々が同席されていた。そして故国日本のことや同大学の近況等に話がはずんだ。

総長公邸での晩餐会には、今年、同大学で名誉学位を賦与されるものが招かれ、同大学出身のインガソール氏（元駐日米大使）夫妻も、私のためにわざわざ参加して頂いたのが嬉しかった。料理は、あくまでアメリカ流で極めて簡素なものであったが、軽いユーモアの中に素朴な善意が汲みとれて楽しかった。翌日は卒業式が盛大に挙行され、その卒業式において私どもに名誉学位が与えられるという。多少固くなっていた私も、その前夜祭ともいふべき晩餐会ですっかりくつろいだ気持ちをとりもどすことができた。

翌二十日（月）は、これまた快晴であった。午前十時過ぎ所定の場所に行ってみると、式の行なわれる大学内の広場にはすでに数千人の人が集っていた。私にとつては生まれて始めてのガウンと房のついた角帽が用意されてあった。それを着用におよんで、音楽の調べとともに卒業式典のひな壇まで学生や父兄から祝福を受けながら、長い人垣の中を静かに歩いて行った。

まず総長の祈りから式が始まり、学部毎に修士号を得た卒業生の数と代表者の名前が読みあげられる。法、経、文、医、看護、工、理、音、芸等の各学部があり、二、三名にすぎな

い小さな学部もあるようであった。卒業生は、私どもと同様のガウンと角帽（但し房の色は違っていたが）を着ていた。自分の属する学部が読み上げられると、異様なかん高い声をあげて一同が起立し、代表者が壇上に進み出て卒業免状を受け取る。卒業生の中には白人も黒人も黄色人種もいる。代表者の中には女性もいれば東洋人も黒人もいるという状況で、なかなか多彩な情景である。

最後に名誉学位を受ける私ども一人一人が総長の前に進み出る。すると総長はその人に対して表彰状を読みあげ、学位の種類によって色のちがったうちかけのようなものを自からの手で私どもの肩にかけてくれる。壇下の教授、学生、父兄の間からわれるような拍手が湧く。おごそかであるが同時にアメリカ人らしく陽気なものである。私には法学博士を与えられたが、同時に他のアメリカ人には法学の他、音楽、芸術、神学、文学、理学等の博士号が与えられた。

最近外国人で、この大学から学位を与えられた人の中には、西独のアデナウアー、ブランド両首相、国連のハマーシヨルド、ウ・タント両事務総長等がおられる。日本人では伊藤博文公が名誉学位を与えられている。私に対して与えられた表彰状は、次のような文句で綴られてあった。私にとっては、身に余る望外の名誉であることは申すまでもない。この榮譽

は、しかしながら、私に対してというよりは、日本と日本人に与えられたものであることは言うまでもないことである。ここに日米両国の友人に心から感謝したい。

(次頁に英文の表彰状を掲載する)

Citation

Yale University Commencement

May 20, 1974

Foreign Minister Masayoshi Ohira

In a world grown dangerously small and mutually dependent, you have had the burden of guiding the foreign policy of one of the world's most important powers. Patiently and persistently, you have worked to create an international harmony based on trust among nations. As your voice has sought calm in a world made tense by crisis, so your serenity in time of trouble has given new strength to the bonds of friendship between our two countries. Yale University is proud to confer upon you the degree of Doctor of Laws.

【表彰状の日本語訳】

貴方は、危険なまでに小さくなり、相互依存関係を深めた世界において、世界の最重要国の一つである国の外交政策を指導するという重荷を担ってこられました。貴方は、諸国間の信頼に基礎を置く国際的調和の創造のため、忍耐強く、間断なき努力をつくしてこられました。貴方は、危機によって緊張する世界に平穏さを求め続けてこられました。困難にあたっての貴方の穏かな姿勢は、日米両国間の友情のきずなに新しい力を与えるものでした。エール大学は、貴方に対し法学博士の学位を授与することを誇りとします。

故中山伊知郎氏の葬儀における弔辞

昭和55年4月23日、一橋大学初代学長で恩師の中山伊知郎氏を追悼した
もの。『永遠の今』、『大平正芳全著作集』5巻（講談社）に収録。『永遠の今』
は大平正芳の総理在任中に行った演説、講演、挨拶、訓示、対談、弔辞
など大平内閣に関する貴重な記録を収めている。
中山伊知郎氏の多岐にわたる業績については、弔辞の中で語り尽くされ
ているので、別枠の略歴は割愛させて頂く。

本日ここに、故中山伊知郎先生の葬儀が執り行われるに当たり、謹んでご霊前にお別れのご挨拶を申し上げます。

私は四月九日の夜先生の訃報に接しました。最近入院加療中とうかがってはおりましたが、ご容態は、快方に向かい、煩を避けてのご静養と信じていた私は、この思いがけない報せに、呆然として自失するていであります。昨年七月の物価安定政策会議において、先生は、いつもの通り整然とした座長ふりを示され、いよいよ正念場を迎えようとする物価政策

に、政府の真剣かつ周到な対応を求められました。その先生が突如他界されようとは、私にとっては到底信じられない衝撃でありました。

ノーブルで威厳に満ち、あたたかい親切と軽妙なユーモアを忘れられなかった先生を、春に背いてわれわれの手から奪い去った天の非情さに、やり場のない憤りすら覚えざるを得ないのであります。

先生は、明治三十年、三重県伊勢市に生をうけられました。早くから英才の誉れ高く、宇治山田中学から旧制神戸高商を経て一橋大学に進まれました。ご卒業後は、母校の教授として、後には学長として、終始母校のために尽され、大学の内外から広く敬慕されておりました。

私自身、先生が新進気鋭の助教授当時、経済原論の講筵に侍る機会に恵まれました。純粹経済学の体系構築に精根を傾けられていた当時の先生の歯切れのよい講義は、われわれにとっては待ち遠しい魅力あるものであります。

先生は、恩師シュンペーター教授の流れを汲み、わが国における近代経済学の先駆者として経済学界に大きい功績を残されました。先生の学位論文「発展過程の均衡分析」は、経済の発展過程のすぐれた分析であり、「安定と進歩の条件を探索するのが経済学の本来の目的

である」という先生の洞察は、経済学を志すわれわれにとつては力強い指針でありました。

同時に先生は、理論と実践の一致を求められ、研究室のみに止まることなく敢然と行動を起こされた方でもありました。戦後のわが国経済社会の復興、発展は、先生の存在を抜きにして語ることはできません。とりわけ、戦後労使の関係が激しく揺れ動いた時期に中央労働委員会会長として文字通り粉骨碎身されました。公正で均衡のとれた先生の判断により数々の大争議が見事収拾・解決に導かれたことは、いまなお記憶に新しいところでもあります。最近のわが国の労使関係は、諸外国にその例をみないほど健全な歩みを続けておりますが、これこそは、労使の信頼を一身に集められた先生の永年にわたるご指導が開花し、結実したものに外ならないものであると信じます。

先生はまた、戦後における歴代政府の政策の立案形成に参画され、ここにもまた大きな足跡を残されました。物価安定政策会議をはじめ、税制調査会、運輸政策審議会の議長又は会長など数多くの公職に就かれ、つねに真剣にその責任を果たされた先生の態度は、各方面から高い評価と深い尊敬を受けられました。さらに先生は、外にあっては、その天賦の資質と優れた国際感覚とにより、ユネスコ、ILOをはじめ、数々の国際会議においても縦横に活躍されました。

先生は、生前、その優れた学術的業績によって文化功労者に選ばれ、また、このたび、その内外における数々の功績をよみせられ、かしこきあたりより従二位に叙され、旭日桐花大綬章を加授されましたことは、誠にむべなるかなと思います。

われわれは、いま内外にわたり新たな改革と対応とが厳しく求められております。「暮春すでに春服成る」という先生が愛好された言葉は、事に先んじて備えるところがなければならぬいまの時代においてこそ、われわれが肝に銘ずべき教訓であると信じます。われわれは、先生が身を以て示されたその洗練された思想と実践を道標として、新しい時代の開拓に取り組み、先生のご遺志にこたえてまいりたいと思います。

中山伊知郎先生。いま先生を送るにあたり、八十一年のご生涯に不滅の光芒を放たれた先生のご遺徳を欽慕しつつ、先生のご冥福を祈って、お別れのご挨拶いたします。

大平哲学のふるさと

前一橋大学学長（当時）。同大学第9代学長 編集註） 宮澤 健一

『大平正芳回想録―追想編』（昭和56年6月12日 大平正芳回想録刊行会）に所載。宮澤学長が、同大学の大先輩である大平の卒業論文『職分社会と同業組合』を読んでの講評と追想。曰く、「大平総理の哲学の発端、ならびにその人柄の一端が、躍動している」「読書家・思想家としての人間大平さんの真髓の端緒が物語られており、その若き日のふるさとを偲ぶことができる」と。

大平さんは、表にあらわさぬ気迫と情熱を心に秘めて生涯を貫かれたが、その源泉の一端を若き日に求めてみることは、許されてよからう。その愛した母校、東京商科大学は、そうした心のふるさとの欠かせぬ一環であったように思われる。私にとって大平さんは大学の大先輩にあたるが、最近たまたま一橋大学の図書館で、若き日の先輩に出会う機会をもつことをえた。図書館三階の書庫の奥に、卒業論文がぎっしり詰まっているコーナーがある。そこで

大学ゼミナール時代の大平さんの作品を手にし、その考え方にふれることができたのである。

教授一人に学生が数人から十数人の少数規模で配されて研究指導を受けるゼミナール制度は、明治建学以来連綿と続いた一橋大学の特色であって、ゼミを通じて作成される卒業論文は、学生がその情熱を理性に結集させてつづる最重要課題であった。上田辰之助先生のゼミナールにおける大平さんの昭和十一年卒業の論文テーマは『職分社会と同業組合』であった。その内容は、イギリスの有名な経済史家・思想家・労働教育家トニーの初期の労作の研究が一つの中心になっているが、論文に示された若き日の考え方は、後の日の、偉大な政治家としての信条に引き継がれ、その土台づくりの一部となっているように感ぜられる。

序文（小序）の中で語られているところによれば、上田先生のご指導で、トニーの『獲得社会』（The Acquisitive Society, 1921）を読まれたとき、当時「キリスト教に親しむ」ようになっておられた大平さんは、中世の聖トマス・アケイナスの政治経済哲学に思いを馳せ、その現代版としてトニーを位置づけ理解されようとした。

そして曰く、「自由競争も階級闘争も、ともに社会を混乱に陥れて」いる現在、「この対立を止揚せる全体、分裂を克服する統一、闘争を超えた協調が要望されるのは、歴史の必然の歩み」であるとしている。そして同時に、現実的な関心として、アメリカの同業組合の性

質の検討を試みながら、当時、世界各国で進展しつつあった産業統制の動向に着目して、これを「国家と個人とを媒体する組織」としての組合としてとらえる見方を打ち出されるのである。経済学者は、機能（ファンクション）の側面の研究を重視しているが、組織の研究は閑却しているのではないかと批判し、同業組合研究を位置づけて、これを単に、政治や経済の側面だけではなくて、「個人の社会に対する正しい結びつきを教え、更に進んで全体のために殉ずる精神を培養する」ものとしてとらえる。そして卒業後の研究と思索の方向を、ここに求めると語られるのである。

専門の違いもあって、私の理解は十分とはいえないが、若きクリスチャンとして「個人」の社会に対する正しい結びつき」に悩み、トニーを読むことによつて、一方で思想的には、古く遡つて聖トマス・アクイナスの世界にあそび、他方、現実的には、時代の問題としての同業組合の動向をとらえようとしたもの、とみることができよう。もとより、同業組合の位置づけ方には異論もあろう。しかし、上記のような幅広い年代に及ぶパノラマ的構想の中に、後年の、日本の指導者としての大平総理の哲学の発端、ならびにその人柄の一端が、躍動しているのを感じる。

これは、誠実と強靱な意思に貫かれたご業績の背景の一面をのぞかせるもので、総理ご在

任中、とくに国内よりも海外から高い評価を集めた大平政治の思想的基礎について、その源流にふれたい思いである。しかもここには、偉大な政治家としてだけではなく、同時に、読書家・思索家としての人間大平さんの真髓の端緒が物語られており、その若き日のふるさとを偲ぶことができたように思えるのである。

『職分社会と同業組合』

前項で取り上げられた東京商科大学時代の卒業論文のうち、序文のみの紹介である。初出は前掲『回想録』3部作（追想編・伝記編・資料編）のうち「資料編」に掲載。その後、『大平正芳全著作集』1巻（講談社）に収録。卒論は、昭和11年1月21日に脱稿。全370頁に及ぶ。大平自身まさか半世紀を経て公開されるだろうとは想像すらしていなかったであろう。ゼミの師である上田辰之助教授の影響が色濃くにじみ出ているが、論文のテーマ「近代産業社会を超えた社会」の模索は大平のライフワークとなった。

内容目次

小序

本稿の構成と参考文献

（三頁―一九頁）

（二二頁―二八頁）

第二編 トーネーの職分社会論

(二九頁―二三六頁)

(イ) 権利と職分

(三一頁―九六頁)

(ロ) 獲得社会論

(九七頁―一五四頁)

(ハ) 職分社会論

(一五五頁―一九〇頁)

(二) トーネーの学説の時代の意義

(二九一頁―二三六頁)

第二編 アメリカの同業組合論

(二三七頁―三七〇頁)

(イ) 同業組合の概念規定

(二二九頁―二四四頁)

(ロ) 同業組合の史的発展

(二四四頁―二九二頁)

(ハ) 同業組合の組織

(二九三頁―三〇八頁)

(二) 同業組合の内部行政

(三〇九頁―三一八頁)

(ホ) 同業組合のアメリカ産業機構上に占める地位 (三一九頁―三七〇頁)

以上

小序

上田辰之助先生の研究室の門が私に開かれてから最初に御指導をうけつつ読んだ書物は『トーネーの獲得社会』であつた。そこにはトーネーが彼の卓越せる着想と豊富なる経済史的蘊蓄を傾けて、中世紀的協同社会が如何なる必要により如何なる過程を経て崩壊せしかを明らかにし、その廢墟に芽ばえた資本主義社会がその本来の成立条件を忘却して如何に個人絶對乃至は權利本位の社会に推移して行つたかの経路を描写している。彼はかくしてあらゆる障壁を踏み越え守るべき限界を無視して發展し分裂したる資本主義社会を社会職分の光に照して分析批判し其諸弊惡を暴露し併せて來るべき社会は如何なる嚮導理念を支柱として組立てらるべきかに対し示唆を与えている。

分觀的機械觀と權利本位思想の所産たる自由競争も階級闘争も共に社会を混乱に陥れ、資本主義社会の頹廢現象は覆うべくもなく私共の眼前に露呈されている。所謂近代精神はその往くべき処を行きつくし、今や新なる転回を余儀なくせしめられつつある。思想の対立葛藤、そこから生ずる社会の混乱紛糾は人々を駆つて不安と混沌の巷に追いやりつつある。ここに於てこの対立を止揚せる全体、分裂を克服する統一、闘争を越えた協調が要望されるの

は歴史の必然の歩みでなければならぬ。かかる客観的情勢に圍繞されて私はト・ネーを繕いたのである。そして豊富にして該博なる経済史実を駆使して織りなす彼の流麗なる行文と辛辣なる皮肉は私を魅惑してしまった。私は彼に刺戟されて「全体と部分との関係」を経済史的に或は社会史的に考察せんとする希望と欲求を抱き且つそれを考えるについての訓練をうけた。しかし彼の所論は、私が読了せし限りに於ては、新たに職分社会の構成を提示すると言ふべきものではなく、それと対蹠的立場に立つ権利本位の社会の諸々の弊害を歴史的に闡明し且之を暴露せんとするが如きものとうけとれたのである。従つて私は彼の所論を通じてその背景をなす協同体社会の目的は何かその身分的構成はどうか或は又それと国家との関係はどうか等については遂に学びとる事が出来なかつた。しかるに私は幸にト・ネーの研究と並行して上田辰之助先生の「欧洲中世経済学説史」の講筵に侍る機会を与えられた。それは主として中世の輝ける聖者、「古代文化と基督教精神との明快にして透徹せる折衷者」、トマス・アクィナスの政治経済学説を中心として講述されたものである。恰も其年は先生が社会職分を中心とせる聖トマスの経済学説に関する多年の御研究が結実されて東京帝国大学より経済学博士の栄位を獲得された年であり、三省堂の「人と学説叢書」の刊行に参画されて自らも『トマス・アクィナス』をものせられ、私もその一部を恵与された年でもあつた。

かくて幸に私はトマスの深遠なる思想に接する機会を他の学生の誰よりも多く与えられた。偶々私個人としても或機縁からキリスト教に親しむようになり、それに関する各種の文献を研究していたので、トマスの思想は異常なる興味と言わんよりも教養上の切実なる要求として私に迫つて来たのである。かかる好条件に恵まれて上田辰之助先生のトマスに関する諸々の文献を繙くにつれて、トマスの大なる体系が次第に明瞭なる姿を以つて脳裏に描かれて来た。殊にその政治経済思想の根幹をなせる社会職分の原則が、その背景をなせる協同体の目的並びに構想との関連において理解されかけたのである。そして又トマスに於ける社会の重要な属性たる目的論的秩序、自発的義務的職分意識、其結果として顕現される協調と平等の諸々の特長が、権利本位思想によつて分裂し、個人的利己主義によつて腐敗せる現時の社会に於いて、顧みられ憧憬される所謂「中世紀的協同体への復帰思想」の台頭せる意味もよみとる事が出来るようになった。かくして私が疑問としていたトナーの所論の背景が、トマスを学ぶことによつて、歴史的且立体的に捕捉されるようになった。他面トマスの政治学説並びに経済学説の現代的意義が逆にトナーの労作を通じて把握されるものと信ずるに至つた。

かかる研究過程に於いて、私の学問的興味は何時の間にか職分思想に注がれはじめ一方上

田辰之助先生の御研究のテーマにも刺戟されて組合国家其他の組合運動並びに組合統制に対しても絶えず注意を怠らないように心掛けるに至った。そしてその時すでに私の卒業論文のテーマはかかる分野に之を求めようとの心構えを持つことになつていた。加之、卒業後の私の研究の方向をかかる方向に定めるとしても、相当の学問的結実性を齎すものであると云うことを確信するようになった。何故なれば近時に於ける各国の産業統制の動向が、国家と個人との間に介在する半自治的な団体を媒体とするような方向をさしているのみならず、又自由競争と私有財産制度とに依拠せる資本主義社会の諸々の弊悪は、必至的に組合の結成を促していると言うが如く、この問題は現下に於ける重要な政治的經濟的問題である。しかし私がこの方向に向けられた研究を卒業後も尚続けたいと希望し且続けるに足る価値あるものと考えるのはそれだけの理由に止るものではない。かかる研究は私をして全体と部分との關係を熟察する機縁を齎し、個人の社会に対する正しい結び付きを教え、或は更に進んで全体の為に殉ずる精神を培養する上に与つて力あるものである。聖トマスが今日に於いても尚顧みられ尊重せらるる所以は彼の学説が極めて秀逸であり今日に於ける問題に対する貴重なる示唆を含蓄していると言っただけではなく、彼の学説乃至はそれを通じて顕現される、彼の人格の教育的価値が比類なきものである為であろうと信ずる。かくてこそ真に古典の名に値す

る古典たる資格があるものと考ええる。

資本主義経済の次に来るべきものは組合主義の経済であると言われたり、或は現世紀は正に組合国家の世紀だと言われているように、現代の世界各国は程度の差こそあれ各種の組合の結成を急いでいる。それは資本主義独自の支配的態様たる対立と競争を止揚せるものであり、資本主義自体の発展の産物でなければならぬが、同時に又其他の非経済的要素も多分に其動きのうちに盛られている。民族的なるもの国家的なるものの復活を通して表われる復古思想の如きその一例である。かかる経済的乃至非経済的要因は、組合の結成によりて、現下の産業組織の上に大いなる変化を呼び起しているのである。しかるに経済学者の多くは経済の機能的側面乃至は作用的分野のみにその研究の主力を注ぎ、その組織的側面の研究を閑却せる憾みなしとは言えない。つとに上田辰之助先生はこの組織研究の不足を嘆ぜられ、私共同人にその方面の開拓を慫慂された事もあつた。世人は挙つて金ブロックの動搖、アメリカ銀政策の波紋、或はアルタルキー化の進展等々の所謂外面的事象乃至は傾向に興味を奪われているが如くにみえるが、世界史は一刻と雖も組合結成への黙々たる歩みを止めない。

私がかかる事情の下に置かれ、かかる動機に鞭うたれてこの論文を草するに至つたのである。しかるに国家試験を終えてからの十月、十一月は氣分の弛緩とテーマのとり方に煩わさ

れて徒らに低迷を続け少しも捗らなかつた。十二月に入つて漸く倉皇として起草したのである。為に参考の範囲も狭く且その思想を十分に咀嚼するの余裕もなく、極めて粗雑にして浅薄なるものとなつてしまつて、先生の御期待に背くこと甚だ多きを省みて慚愧に堪えぬ。殊に最初の計画たりし独乙の組合形態の研究を纏めあげてここに掲載することが出来なかつた事は返す返すも遺憾である。唯向後、驚馬に鞭うちての学問的精進を以て、先生の高き学恩に報い奉ることを期している。

昭和十一年一月二十一日

中野の寓居にて 大平正芳

本稿の構成と参考文献

本稿の第一編はトーネーの職分社会論の解説を中心としてその時代的意義を探ねることに重点を置いた。その方法としてトーネーの次の三論文の全訳を掲げてその要旨を略註として附加して置いた。

1. Rights and Functions (Acquisitive Society, p.9)

2. The Acquisitive Society (Acquisitive Society,p.23)

3. The Functional Society (Acquisitive Society,p.96)

そして次にその現代的意義を尋ぬるに当っては先ず現下の思想の動向を一瞥し、それが或意味に於ける中世紀的協同体への復帰を要望せる点よりして、一応トマス・アクイナスの社会観を説明し、トマスとトナーとの関連に及び、最後に組合思想の哲学的根拠となつてゐる全体主義の論理的性格を叙述し併せて若干の批判を添加した。この部分に関する参考文献をあぐれば、

上田辰之助博士 トマス・アクイナス

〃 組合国家の思想と其精神的基礎（神戸商大新聞部刊行六甲台）

上田貞次郎博士 社会改造と企業

佐藤 弘氏 経済地理学総論

阿部源一氏 職分社会思想の史的発展（国民経済雑誌五十五卷六号）

小野清一郎博士 法理学的普遍主義（中央公論昭和十一年一月号）

三木 清氏 全体主義批判

Creange,Henry : The Guilds of America,N.Y,1934.

R.H. Tawney : The Acquisitive Society, London, 1923.

× × × × × × × ×

第二編はアメリカの同業組合の史的発展、其組織、内部行政組織を調べ、最後に其産業機構上に於ける地位を考察した。そしてその目的とするところは、かかる研究を通じてアメリカに於ける同業組合の性質を明らかにせんとせしことである。この研究にあたっての私の態度は、職分原則に照明してアメリカの同業組合を貫く精神と基本傾向を紹介批判し、更に進んで出来得べくんばそれを媒体としてアメリカ産業社会の特性を捕捉せんと努めたことである。この見地に立脚して各章の結尾に於いて私は自分の考えを総括的に述べて置いた。

(参考文献)

第一章の同業組合の概念規定に於いては、

Foth, Joseph Henry : Trade Associations ; their services to industry, N.Y. 1930.

National Industrial Conference Board : Trade Associations, their economic significance & legal status, N.Y. 1925.

第二章、同業組合の史的発展については

Foth, Joseph Henry : Trade Associations ; their services to industry, N.Y. 1930. (第一期より第四期まで)

Galloway : Industrial planning under codes, N.Y. 1934. (第五期即 N・R・A におこす)

第三章第四章の組織及行政については専ら次の著書に依った。

Foth, Joseph Henry : Trade Associations ; their services to industry, N.Y. 1930.

第五章、同業組合の産業機購上における地位については次の書物の第五部 (The Place of

Trade Associations in the industrial structure:

1. The Basic Advantages of the Competitive system.
 2. The Outstanding Defects of Unco-ordinated Competitive Rivalry and the Functions of Business Cooperation.
 3. The Legal Status of Trade Association Activities.
 4. Internal and External Safeguards Against Restrictive Arrangements.
 5. The Promise of the Trade Association Movement.
- National Industrial Conference Board : Trade Associations, their economic significance

& legal status, N.Y. 1925.)

の抄訳を掲載し若干の批判を加えた。

尚各章結尾の批判に当っては第一編の参考文献より大いなるヒントを与えられたが、殊に次の書物に負うところが多い。

Creange, Henry : The Guilds of America, N.Y. 1934.

けん てき こう

硯滴考 [16]

令和六年六月吉日 発行

発行者 公益財団法人大平正芳記念財団

〒102-0082

東京都千代田区一番町 22-4 一番町館 202 号

TEL : (03) 3230 - 2213

FAX : (03) 3230 - 2214

URL : <https://www.ohira.org>

